

ます。そこには私は甚だ不満があるので、下らないことを世の中は言つて居るものだと思ふのでありますが、さう言つただけでは分らぬから、自分の愚見だけを申上げて、成る程彼が不満を抱くのも、無理ではないと云ふ御諒解を得れば、この講演の目的は達せられたのであります。

四 文明史の三大時期

文明史を大観致しますれば、文明批評家の大體一致して居る意見は、第一期の文明は文明の諸要素が混成的であつて、哲學、宗教、道德、政治、經濟、殖産、興業、さう云ふやうな文明の諸要素が混合して居つて、はつきり區分がついて居ない、哲學と宗教の區分、宗教と道德の區分、道德と政治の區分、と云ふやうなものが、混成的の有様に在る時代。この第一期を過ぎて第二期に至ると、分化的文明と稱して、哲學は哲學、宗教は宗教、道德は道德、政治は政治と云ふ領域が定まつて、さうして各々専門的の働きをするやうになる、それは無論文明の一進歩であるけれども、餘りに相互の聯絡を

忘れるから、政治と道德とは全く關係がないやうに考へ、宗教は哲學と全く關係がないやうに考へてしまふ。吾々は宗教家だからと云ふので、眞理上の批判などは顧みない、又政治家の方に於ても、政治の領域を狭く考へたから、そこに間違つたことが現はれて來て、遂に今日の文明は行詰つた。この行詰りと云ふことは、分化的文明が文明の諸要素の聯絡關係を切り過ぎた結果である、最早やこの分化的の文明は行詰りである、故に第三期の統一的文明に進むべしと唱へて居る、統一的の文明とは、政治と道德の調節、道德と宗教の調節、經濟と道德の調節、經濟と政治の調節と云ふやうに總ての大事なもの、或る領域を守ると同時に、一面には適當なる調和聯絡を取つて統一ある文明を創設すべしと云ふのである。

而して今日國際關係に於て人道主義を標榜するとか、或は國內に於て、勞働問題に就て多數の幸福を圖るとか、言ふやうなことは、道德と政治が分離し、經濟と道德とが分離する故に、困難を感じて來たその反省的自覺である。國際關係の上に政治と道德の關係が分離するから、國際間に於て人道正義が破壊されて來るのである。何も新

らしいはことなり、即ちさう云ふやうなことは統一的文明の着想中の、一部分々々の現はれてあります。

而してさう云ふ思想は古くより現はれて、第三期の統一的文明に這入つたと云ふことを考へれば、我國の例へば政治家であるとか、實業家であるとか云ふ者は、そこに道德との聯結、宗教との聯結、又此理想的統一的なる文明は如何にするかと云ふ着想に這入るべきは、過去數十年前以前の要求であつたと思ふのである。然るに今にして日本の政治家が日本に於ける宗教の何たるを知らぬ、東洋道德の根據の何たるを知らぬと云ふやうなことであるとするならば、それは非常に後れた人であると思ふ。今頃それが非常に新しいやうに感じて驚いて居るのは、餘程古ぼけた頭の間人であると言ひたい。今頃に至つて統一的文明を作らんならぬと云ふ着想が、漸く理解されるやうな人間は、思想の問題に這入つて彼是言ふ資格はないと云つてもよいのである。

五 統一的文明と佛教

故に其處から考へたならば、東洋文明の深遠なる根據を爲して居り、統一的文明の各方面を含有して居る所の佛教を、政治家であれ、實業家であれ、苟くも國家を思ひ文明を重んじ、世道人心の上に貢献せんとする所の人が、何時までも除外し居ると云ふやうなことは、實は明治維新の前の、ジョン・ヘン親爺であります。世の中の人は、佛教の僧侶であるから佛教の爲に氣焔を揚げると考へて、「彼奴は坊主だから」と云ふやうなことを言つて居るけれども、如何にもその暗愚に驚かざるを得ぬ。

六 政治の本義とは何ぞ

さて政治の本義に戻つて考察致しますれば、何時の時代にあつても政治の本義、政治の本質と云ふものは變りはなからうと思ふ。變るのは運用の末に屬する事である、苟も人類が國家を組織して文明を作るに就ては、その文明の一大要素として政治を行ふ以上は、歐羅巴で戦争したから政治の本義が變るとか、「カイゼル」がどうしたから政治の本義が變るとか云ふことのあるべき筈のもてない、そんなことは洵に一時の

出來事である、文明史の一部分である。

然らば政治は本來何が大切かと云へば、國內に對しては無論人民の幸福を保障すること、その國民の人格を高めることである。故に幸福を保障するに就ては、商工業の發達及び社會政策の實行が主になつて來る、併し人格を養ふと云ふことに就ては、教育なり宗教なり又思想の事が大切になつて來る。この人民の幸福人格の向上と云ふことは何時の時代でも政治の國內に對しての本義である。今日に至りて始めて國民の人格を養ふが大事になつたのではない、今日に至りて始めて人民の幸福を圖る爲に社會政策の必要が生じた譯ではない、社會政策の必要であるとか、思想の善導の必要と云ふことは、政治上に於て絶對的の必要を有し、如何なる場合と雖もその必要の程度は少しも變化のあるべきものでない。又政治の對外的本義は、その國威を持ち國光を輝かし、國際の信義を守つて、人類全體の文化に貢獻して行く、文明の惠澤を共にするが、政治の本義である。何も歐羅巴で戦争したから國際關係が大事だとか、人道正義が大事だと云ふものではない。古い時から、釋迦如來のお經の中にも、今亞米利加の

大統領が言つて居るやうなことは澤山に説いてある。何も新らしいことではない。昔から國と國とが戦争をすると云ふことはいかぬから、その間は交情じやうじやうよくして仁義を守れと云ふ話は、何時でも現はれて居ることである。今日歐羅巴の大戦争で騒いで居る所の新らしい問題と云ふのも、實は尋常の事である。

七 經濟の通義とは何ぞ

又經濟の通義に就て考へますれば、是れは生産を交易してさうして相互の利益を圖り、國民の生活を安全にすると同時に、廣くは人類の福祉を増進するに在り、經濟の上に於て經濟的帝國主義と云ひますか、産業的帝國主義と云ひますか、經濟力を應用して、さうして自國の利益のみを圖つて、他國人の生血を吸ふと云ふやうなことは、武力を以てすると同一の罪惡である。獨逸が武力を以て軍國主義をやつたのが罪惡であるならば、經濟力を以て産業的帝國主義を行ふも同一の罪惡であつて、閻魔法王の前に引出されるれば、同一の極刑に處せらるべきものである、生血を吸ふに於て何も違

ひはせぬ。故に社會主義はそれに就ては早くから反對して、全體貿易と云ふことをやつて、さうして資本家が他の國の生血を吸ふのはいけないと言つて、生存競争を信條として他の國を經濟的に壓迫するに就ては、非常に反對を表して居るのでありますが、是れもある意味に於ては無理からぬことだと思ふ。

どうしても經濟が道德より分離すれば罪惡である、國內の人間に就ても、甲の場所と乙の場所に出來たものを交換すると云ふことは、相互の利益相互の幸福を基として居るべきである。國と國との間の貿易にしても、相互の利益を基とせねばならぬ。是れは經濟學に於てはどう云ふ解釋をして居るか知らぬけれども、西洋の經濟學がどう云ふことを論じて居らうとも、そんなことに盲從する必要はない。經濟の本義を、人間の生産を増加し各人の幸福を増加する趣旨に見るならば、どうしても國と國との間には相互の利益が前提でなくてはならぬ。

八 佛教興起時代の文明

それだけの事を前提として置いて、佛教がどう云ふ理想を以て起り、政治とか經濟とか云ふことに、どう云ふ關係を取つて居るかと云ふことを、一々典據に依つて立證して見たい。私の言葉として云へば、「ア、云ふことを自分が考へて言うて居るのならう」と思ふ人もあらうから、一々證據に依つてお話しして見たいのである。

大體釋迦が出た時は混成的文明の時代と云へばさうも見られるけれども、或る意味に於ては寧ろ統一的文明の時代と言つて宜いので、印度の文化は非常に進んで居つた。其處は見やうであつて、随分一方に哲學もあり、宗教もあり、道德もある。又所謂經濟なども、或る程度には發達して居つた、銀行などもあつたさうである。あの時代の文化を調べたものに依ると色々のものがある。現に佛教のお經の中に残つて居る所を見ても、實に豊富なる文明が發達して居たことが分かるのである。而してこの豊富な印度の文化の全體と佛教とは關係を取つて來たのである、釋迦は宗教の開祖と云ふよりは文明の開拓者である。あの當時の文明は、大體婆羅門の思想が基になつて國の歴史は婆羅門より起り、婆羅門に依つて道德があり、婆羅門に依つて宗教がある婆羅

門に依つて社會の制度が出来、婆羅門に依つて實生活が導かれて居たのであるから、釋迦が婆羅門の教を改革したと言ふと、宗教の改革の如く見えるけれども、印度は婆羅門教を基にしたる所の文明であるから、婆羅門教の改革は即是れ印度文明の改革である。故にその中には所謂政治經濟に對する意見も、盛んに述べられて居る次第であります。

九 佛教の政治に關する意見

今簡單に關係のある點を申し上げますれば、先づ政治の方から申しませんが、政治の國內に關する方面に就ては一般の幸福を目的とするが爲に、激しい差別階級を打破して一般の人格を重んじ、彼の「カスト」の制度、即ち四つの階級が婆羅門の教を基にして出來て、それが印度の社會を支配して居つたので、釋迦は極力弊害多き差別的制度を攻撃して居る。その經證は澤山あるのでありますが、後に現はれたと云ふやうなお經でなしに、全くその當時の事を記録した正確なるものと許されて居る阿含の經卷に依

つて一一證據立て、見ようと思ふ。

長阿含の卷六であります、佛が婆私吒ぼししたと云ふ婆羅門に對して言はれた、四姓の差別は根本から人格が違ふ、故にその人格の價值も違ひ、性質も違ふものと考へて居る、是れは賢者の反對することである。何故かと言へばこの婆羅門・刹帝利・吠舍・首陀ぼらもん せつていり びしゃ しゆたと云ふ四つの種姓は何も決して人格價值に於て違ひはない。婆羅門の人が善いことをして、首陀の人が悪いことをすると限つては居ない、婆羅門の坊主にも随分人格の壞れたのがある、首陀の階級に於ても中々善い人格の者もある。人間の價值はその人格とその行爲とに依つて判斷すべきものであるから、この四つに分かれて居る階級を通じて刹帝利の階級にも悪人が居る、婆羅門の階級にも悪人が居る、悪人は悪人、善人は善人、斯の四姓は縦斷すべきものであると言つて、非常な熱烈な話をしました。婆私吒はこの説を聞いて大いに感心しまして、婆羅門を捨て、佛の弟子になつた。佛の弟子になると云ふことの第一は、四姓のカストの制度、さう云ふ因襲を捨て、四姓平等の大精神に歸伏したのである。故に佛弟子になれば、四姓は同一の待遇を受けるから、姓

と云ふものを捨て、しまふ。今まで婆羅門種とか刹帝利種と言つた名前を捨て、しまつて、河の水が同じ海に這入つたやうに、釋尊の弟子になる時には平等に同一味の弟子である。四姓の階級は全然捨てると云ふことを誓はなければ、佛教の信徒たることをも許されないのである。釋迦は非常な熱心を以て階級の弊を打破したので、デモクラシイ人格の平等は、釋迦が三千年前に根本的に實行したることである。

一〇 佛教と奴隸廢止

次に奴隸の問題であります。この民族の解放とか、奴隸の解放とか云ふこと、又は勞働問題などに就ても、ある意味から言へばやはり一箇の解放の思想の残りでありますが、その奴隸廢止に就て釋迦が如何に骨折つたかと云ふに、佛教徒になつて財産を有する者には、毎朝奴隸市に行つて奴隸を買つて、さうして解放することに定めて居るのであります。幾らも證據がありますが、それから奴隸賣買をする者、若くはその市から奴隸を買つて來て、奴隸として使つて居る者、さう云ふ者とは佛教徒は一切

絶交すべく命じて居る。自分がさう云ふことをしないのみならず、さう云ふことをする人とは交はることをも、非常な罪惡として居る。是れは増一阿含四十六の卷であります。

世尊告げて曰く、彼土の四民に二種の姓あり。如何が二と爲す、一には人、二には奴なり。この二姓も亦復定まらず。

「定まらず」と云ふことは、そんなことは根本から極つて居ることでない、人格が違つて居るものでないと云ふことを力説した。その時に聽いて居る人が「どうしてですか人間と奴隸と云ふ者は全く違ふぢやありませんか」と言つた。所が釋迦が言ふには、或は人となる者も後に奴となり、或は奴となる者も後に人となる。而して衆生の類は悉く同一の類にして若干なし。

この意味はどう云ふことかと云ふと、それは人間だからと云つても、貧乏して奴隸になる者もあり、奴隸も出世をして人間になることもある譯だから、奴隸と人間と違ひがある譯のものでない、是れは皆悉く同じ類即ち平等であると言つて、この奴隸の

制度を根本から破壊したのである。のみならずその奴隷を救ひに行くことに就ては増阿含の中にあるが、給孤獨長者即ち須達長者に對して、佛が奴隷を買取つて解放してやれと云ふことを勧めた爲に、彼は奴隷の市に行つて、奴隷を買つて三歸依を與へて解放した。

若し人の奴隷を得る者には、吾れ即ち彼れに行いて語つて言ふ。賢者よ吾れ人を買はんと欲す。

俺が買つてやる、その代りお前は佛法に歸依すると言へ、さうして道德を守ると言へ、宗教の信仰と道德の實行とを誓へば、汝の價ひを拂つて汝を救つてやると言つて、毎朝買ひに行つた。その他先先に云ふた所の、奴隷を賣買する者とは、交際することとを嚴禁して居る。この教化が古くからある故に東洋人は奴隷問題は早くから領解して居ることである。斯の如く最も古い所の佛經——如何にこのお經が新しいと言つても、二千何百年と云ふ以前から現存して居る所の阿含經である、この中に斯の如く釋迦が奴隷廢止に力を盡したことが分明に出て居るのであります。

一一 佛教と勞働問題

それから今頃現はれて居る勞働問題は、要するに利益分配の問題である。色々の問題もあるけれども、主なる點は資本と勞力とに依つて産出したる利益を、如何に分配するか、その分配の權利を資本家が持つて居つて、勝手に勞働者の賃銀を極めるからいかぬと云ふ、その權利の争ひである。所が釋迦は初めから今の資本家のやつて居るやうなことは、決して認めて居らない。さう云ふやうに利益を資本家のみが專斷すると云ふことは、非常な罪惡であるから、その者は引捕へて牢に打込めと説いて居る。是れは尼乾子經と云ふ法華部のお經であります、斯う云ふことがある。

居家の資生は奴婢の共報なり。

「居家」と云ふのは「出家」と云ふ言葉に對するので、一般の在家生活である。「在家」と言つても居家と言つても同じことである。それから「資生」と言ふのは生活を資ける營業、世間一般の生活を資ける處の業務を云ふ、即ち男なり女なりの勞力に依つてやつて

居る、男女職工の力と、それを經營する資本家の共報である。即ち資本と勞力の共同の結果より得たる利益である。故にその權利を言へば、職工がその半分を有するものである、然るに資本家が勝手に利益を恣にして、大いに贅澤を盡し、さうして職工に對する利益は惜んで與へない、假令與へてもそれが少なくあり、又與へるにチビ／＼してやつて居る。さうして常に勞働者をして生活に不足を感じしめて、獨り自分は贅澤な暮しをする、左様な者は、

此れを世間の最大邪行と名く。

今日の如く資本家が我儘のとをやるのは、最も悪いことであるから、さう云ふ資本家は引捕へて牢に打込めと説いてある。この意味に於ては、随分勞働問題の根本解決即ち利益分配の制限まで進んで居るのである、放つて置けば勞働者の團結に依つて、暴力を以て資産家を呪ふことになるし。資産家が早く眼覺めて危険なる勃發を禦がうとすれば自分の利慾の觀念を制限して、さうして職工の幸福を圖ることにしなければならぬ。それ一つである、勞働問題は何も難かしいことはない、資本家が得られる利益

を一萬圓得たならば、資本家と勞働者と折半すると云ふ位の考へを持つたならば、決して問題はない。近來日本の資本家には利益の配分が非常に多い、二割や三割は當り前で七割、八割、十割、甚しきに至つては六十割の配當をして居る。富豪が自己の安全を圖る上から見ても、利慾を制限して、さうして一般職工の幸福を圖ると云ふことを考へなければならぬ。又無闇に金が出来た上に、金ばかり溜めて、詰らぬ娛樂に耽つて居ることは、その人格が低いのであるから、大いに人格を養うて、自分の經營して居る會社の事業の擧がると同時に、そこに勤める職工が皆活き／＼して、この人生を樂んで生活の安全を得、人格の向上を圖つて行くならば、藝者呼んで酒に浸つて居るよりも、自分の會社に勤める職工の活き／＼したる顔を見て、さうして悦ぶと云ふことになりさへすれば、樂みは同じことである。それは要するに資本家の人格の問題だと思ふ、全部ではなからうけれども、資本家は中々に慢心して居る、日本の資本家と云ふ者は、思想のことでも佛敎のことでも、左様なことには中々耳を借さぬ、「吾々はその位のことは知つて居る」と云ふ、口では言ふけれども事實に於てはその通

り實行しないのであるから、この點に於ては日本の富豪は全部とは言はぬけれども、大部分甚だ資格の足らぬ者である。是れが爲に労働者の反感を招き、社會を煩はし、國家を災ひする點は少なからぬのである。今度の米價問題の騒ぎにしても、米が高いと云ふ騒ぎであつたか、富豪の專横に對する反抗であつたか、解釋に苦しむ位であるから、して見ればさう云ふことに就て大いに慚愧しなければならぬと思ふが、中々彼等は慚愧しない。故に佛教の如き宗教を以て釋迦が言つた通り、左様なことをする者は最大邪行であると云ふ聲を、一齊に揚げるやうになりさへすれば、随分そこに效力があるだらうと思ふ。

二二 佛教の教ふる衆生恩

釋迦は衆生恩と云ふことを説いて居る、この點もよき參考になると思ふ。労働問題は利益の問題であると同時に人格の問題である。幸福の問題であると同時に待遇の問題である。その處に引かゝつて居るのであるが、今申す利益の問題は「共報」と云ふこ

とて解決が附く、人格の問題は先きに云ふ四姓を打破する思想などがそれである。さうして尙その以上に、西洋などが餘り言はない思想が佛教の中にある、それは衆生恩と云ふ思想で、互ひに人格を認めるところではない、その者を恩ありとして尊敬を拂ふ。資本家から觀れば、労働者が勞力を以てやつて呉れるから、自分の事業が出来るのである、彼等の人格を尊敬するところではない、自分の利益は労働者の爲に得られて居るのであるから、その恩義を考へて行く。労働者は又、資本家があつてその事業の經營をやつて呉れるから、自分の仕事があり、妻子一族を養ふて居るのであるから、單に自分の勞力の働きとばかり考へてはいけない、資本家の恩義を感謝する精神を持たなければならぬ。で労働問題に就て、温情主義であるとか、幸福主義であるとか、人格主義であるとか、色々のことを言つて居るが、それはやはり西洋の思想の生嚙りだらうと思ふ。東洋の思想では古來奉公人と云ふ者は、主人の恩を深く感ずる、随つて又主人の方からもその奉公人を愛するのみならず、お前のお蔭で家が榮へて行くのであると云ふやうなことも、言うて居つたものである、故に新らしき労働問題と言

つても、衆生恩の思想か徹底したならば、非常に高い意義に於て解決されること、思ふのであります。

一三 佛教と救濟事業

それから救濟事業、社會事業であります。それ等のことも常に労働問題を利益の分配から解決するのみならず、社會の救濟事業からもやらなければならぬ、それは労働に従事することの出来ない程な低能なる者もあるし敗北者もあるし、利益の配分には到底與かることの出来ない憐れな盲目めくらもある譯であるから、どうしてもこの社會全體を保全するに就ては、社會事業救濟事業がなくてはならぬ。そのことを釋迦は到る處に説いた、行きなり佛教に這入れば、多くの道徳行爲の一番先きに説いて居るものは施しである。即ち惠施と云ふことを獎勵して居る。それは單に物質ばかりではない、思想の善導を圖ると云ふやうなことも、それは精神の糧を與ふる所以であつて、やはり一種の施しである。故に正しき思想を有する者は思想を以て社會に施し、財力ある者は

財力を以て社會に施し、各々己れに相應したるものを以て他に施して、全體の幸福に資するのを惠施と云ふ言葉を以て釋迦が説いた。それはモウ佛教に這入つたら、這入つた日から必ず實行させる、即ち「信・戒・施・慧」と説いて居る。信仰と道徳と惠施と智慧——施しと言つても道徳の一部であるけれども、特に信仰、道徳、施し、智慧と云ふやうに施しと云ふものを必ず別出して説いて居るのである。或る者はそんな温情主義であるとか、救濟主義と云ふやうなことはいかんと云ふけれども、それは働き得る人間ばかり観るからである、社會はどうしても温情主義なり救濟の精神からやらなければ助からぬ者がある、今申す通り、何の働きも出来ないやうな無能の者が随分ある譯であるから、社會は労働問題職工問題のみを解決しても足らぬ、故にやはり救濟事業、社會事業を獎勵しなければならぬ。それには國家がその事の經營をやることは無論宜しい、國家的社會的政策も宜しいけれども、單に國家ばかりがやると云ふのではなく、國民の相互扶助の精神から、さう云ふ事業を經營すべきである。さう云ふことの爲に租税を賦課される、それは喜んで負擔すると云ふ理解が充分になつて來なければ

ばならぬ。それにはやはり社會的教化を要するのである。

一四 佛教と刑罰

それから人生には刑罰、法律を認めなければならぬ。「佛教などは徳治主義で、道德とか教化とか云ふことを以て進むので、この人間の悪い奴を取締つて行く所の法律や制裁のことは、考へて居らぬだらう」と云ふ人もある。それは西洋の宗教には、法律に反對したやうなへまな頭もあつたか知らんけれども、佛教は決してさう云ふものではない、刑罰は是れは亦下等な人間、道德を以ても、教を以ても導くことの出来ないやうな劣等なる人間があるから、それには刑罰の制裁を以て、改過遷善せしめなければならぬと云ふことは、尼乾子經の中に非常に詳しく説いて居る。併ながら刑罰と云ふものは、その人間を惡むのではない、其の人間は一面から言へば洵に可哀さうなものであるから、餘程親切な精神を土臺として、又その調べは、最も態く吟味をしてかゝらなければならぬ。そこに冤罪を受ける者があつてはならぬと言つて、刑罰の必要と

同時に、刑罰を施行するに就ての注意を精しく説いて居るのである、少なくとも五つのことは考へなければならぬ、一つにはその事實調べが非常な大事なことである、事實に違つたやうなことをして、人を刑罰に處してはいけない。又二つにはその人を刑罰に處するにしては、十分家庭の事情なり、又色々の事情を參酌してやらなければいけない、その人を牢に入れた爲に年寄が困ると云ふやうなこともあるから、餘程その事情を參酌する、即ち情狀酌量がなければならぬ。事實を正確にすると同時に、情狀を酌量する。又三には總て義に依つて處斷す、即ち標準があつて、今て言へば法律に正條の無い限りに於ては、それを處分せぬ。道德の思想から判斷して、それに觸れない者は處分せないと云ふ風に、この正義の觀念、法律の正條に據ると云ふやうな、精神から刑罰はやらなければならぬ。又四には刑罰を人に與へんとするには、その判官であり檢事である者は、餘程慈愛の精神に富み、言葉なども優しい言葉を以てして、威したり何かして、遂に事實でないことを言はせると云ふやうな壓迫をしてはならぬ。第五には元と／＼この刑罰などを受ける人間は、同じ人間でも可哀さうな者である。

と云ふ慈悲の精神を以て、少しでも怒りの心を以て「彼奴が斯う云ふ口答へをしたから、酷くやつてやらう」と云ふやうなことがあつてはならぬ。この五箇條の意味合を更に説明して、併ながら世にはどうしても刑罰がなければ治らぬから、刑罰は尊重しなければならぬと云ふことを言つて居る。斯う云ふ思想は、今日の法治國と同じ事である。何も今やつて居る處の法治の思想が、佛教と飛離れて進歩して居ることでもない。

一五 佛教と國際道德

内治の事は未だいろ／＼ありますけれども、その位にして置いて、次に國際問題に就て佛教の立場を申すならば、この國際の根本義とは如何と云ふに、相互の平和である。國を造る所以は、戰爭をする爲ではない、他から侮蔑を受くべからざると同時に、他を侵略すべきではない。その事も昔から極つて居ると云ふことを釋迦が説いて居る。是れは面白い言葉であると思ひますが、國家は成るべく戰爭せぬやうにしなければならぬと云つて、増一阿含に斯う云ふことがある。

古昔より諸王にはこの定法あり。

各國の國王には定法と云ふて、古昔より定則が極つて居る。一國を代表する所の王には、どうしても心得て置かんならん所の定法がある。それは國と國とは、權力を争つたり利害の衝突もあるけれども、併し成るだけ相互に勘忍して相互に傷害せず——互ひに譲り合つて殺し合ひをせぬ様に、成るべく外交で解決の附くものは、武力に訴へずして、平和を維持すると云ふことが、一國を代表する處の王者の心得である。それは、即ち古昔より極つて居る處の定法であると言つて居る、今の亞米利加の大統領が言ふやうなことは、この増一阿含に説いてある。『古昔より諸王にこの定法あり』と云ふことを言ひ居るのである。何も珍らしいことはない。故に國際の平和と云ふ考へは、是れは宗教から觀ても、道德から觀ても、政治から觀ても極つたことである。併ながらどう云ふものか、この人間の世の中には、戰爭が絶えぬ。天氣が續けば宜いと思つても雨が降ると云ふやうな工合に、人生には存外戰爭が多い。戰爭の歴史を調べた人

の言ふ處に依れば、歴史在つて以來、四千年の間に、百三十幾年かは戦争の無い年があるけれども、あとの三千八百六十何年と云ふものは戦争をして居ると云ふ。斯の如く人間は存外戦争をする所の生物である。故に釋迦は戦争を絶対に否認はしない、戦争を或る意味に於ては是認して居る。それはやはり法華部の尼乾子經に、戦争をしてもそれが決して罪にならぬと云ふことを明白に論斷して居る。その代りにその戦争をするに就ては、少なくとも三つの事を心得なければならぬ。第一は、戦争を起す軍國的なる王様は、罪の無い者を大勢殺す——丁度今度「カイゼル」が殺人罪を以て訴へられたと云ふ話があるが、その事を言つて居る。斯う云ふ戦争を起して人を殺すのは、甚だ不都合である。どうかさう云ふ亂暴な王様をして我儘の出来ぬやうに、之を抑へつけて、多くの人々の幸福を保護してやらなければならぬ。戦争は好まぬけれども、放つて置くと彼奴が亂暴して、無駄な戦争を起して、多數の者の生命を取り、戦争の慘禍が擴大するから、さう云ふ亂暴な王を取捕へて、多數の者をして戦争の慘禍より脱れるやうにしてやらなければならぬと云ふが一つである。この頃亞米利加の大統

領が言つて居るはこの事である、何か新しいやうに、云ふけれども、新しいことではない。それから第二には、それも成るべくは戦争をしないで、方法手段を以てさう云ふ悪王を降参さして、凶暴な了簡を直すやうにしたいものである、外交の方法に依つてどうぞその人間の考へ違ひを直してやりたいと言ふ。今の平和會議に顯れて居るやうな考を以て、將來成るべく戦争の無いやうにするが、即ちこの第二の思惟である。將に方便を以て、成るべく戦争の少ないやうにすると云ふ考へである。それから第三には、何とか手段を設けてさう云ふ悪い者を生擒せいぎんにしてしまつて、さうして殺害の暴悪を行はせぬやうにしたい、戦争にかゝつてからでも、成るべく人を多く殺さないで、所謂戦はずして勝つと云ふやうな方法を取つて、殘忍なる殺戮を避けるやうにしたいものであると考へるのであるが、然れども、中々對手はその手に乗つて來ないから、どうしても亂暴な態度に出て來る、出て來た以上は仕方がない、吾々の考へはさう云ふ正しい思惟を持つて居つても、彼が無法のことをやるなら仕方がない。さう云ふ場合は平常からその國民に戦争の大切なること、所謂武勇の精神を訓練して置いて、一

且干戈を執つて相見ゆる時に於ては、勇敢なる戦闘をやる、一遍に敵を粉碎してしまはんければならぬ。是れは正義と武力の調節を、巧妙に説いて居るので、その事は尼乾子經の王論品に於て詳しく説いてある。尙ほ涅槃經の師子吼品と云ふ所には、戦争に對しては、武力を以て武力を制すべし、毒を制するに毒を以てしなければならぬと説かれて居る。

刀兵の劫には大力勢を有し、その殘害を斷じて遺餘なからしめ、能く衆生の種々の怖畏を斷ぜよ。

刀兵の劫と云ふのは、戦亂の盛んに起る時代を云ふ。世界に戦争の多く行はれるやうな時には、どうしても自分の國に於ても武力を十分に備へて置いて、さうして斯う云ふ不義不正なる兵力を粉碎して、再び立つ能はざるやうにしなければならぬ。その殘害を斷じて遺餘なからしめ、さうして大勢の人の苦みを助けるやうにしなければならぬと云ふことを説いて居る。斯う云ふ思想があるのに「宗教に於てはそんな事はなからう、佛教は忍辱を基とするもので、坊主は袖から手を出さぬ者だ」と云ふやうなことを言つて居るのは、佛教を學ばぬより來たる謬見である。お經に於ては洵に明白で、今は十分その義を盡しませぬけれども、經典の上の説明には全く詳細を極めて居るのであります。

一六 佛教と正義人道

又國際間に於て人道正義を守らなければならぬと云ふやうなことも、餘程正確に説いてあるので、そこには轉輪聖王てんりんじやうわうと云ふ思想が、到る處に説かれて居る。轉輪聖王と云ふは、軍國主義に反對して居るものである。併し單なる平和主義ではない、今言ふ處の涅槃經の如く威力を備へて居つて、さうして非常に高い理想を持つて居る。その高い正義を擁護するが爲に、暴力を粉碎する處の威力を持つて居る者を轉輪聖王と云ふ。殊に是れが他の國に到る時に於て決してその國を侵略すると云ふやうなことはしない。轉輪聖王は何と云ふことを宣言するかと云へば、「我が來たれるは汝の國を奪はんとするが爲ではない、汝の國を安んぜんが爲である。汝の國の國民の幸福を増さん

が爲である」と云ふことを宣言して、少しもその國の利益、權利を侵害しない、その國の國民の幸福と、人格の増進することを希望する。若しもその國の主權者が、その多數國民の幸福を壓迫し、人格を無視するならば許さぬと云ふことを言つて、輪王は四方を悦服するのであつて、決して自己の國の利益の爲に、他を侵す者ではないと云ふことを説いて居る、是れは一貫した思想である。

それから斯う云ふ思想は、法華部であるから云ふとか、「大乘であるから後にそんなものが加はつたのだらう」と、さう云ふことを随分同じ佛教徒でも云ふのである、「そんなうまいことがあるのは、段々やり居つて、考へ附いて後で付け加へたんだらう」と云ふけれども、さうではない。斯う云ふ思想は阿含の思想の系統から發現して居るのである、大乘だけに斯う云ふ思想がある譯ではない。故に長阿含經、增阿含經ぢやうあこんけふそれから寶積經等、何れもこの輪王に關することが幾箇所にも説いてある。今申したやうな精神は、佛教の小乘、大乘すべてに共通して居る思想であります。

一七 佛教と殖産興業

この位のこととて政治上の問題は措きまして、次に經濟のことを簡単に申し述べます。經濟の方に就ては、釋迦の教化は決して今の所謂宗教の信仰だけを説いたものでなくして、今は能率増進と云ふが、殖産興業の發達と云ふことを念としたものである。釋迦が多くの人々の幸福を考へて居るのも、死んだ先の幸福であるとか、信仰の法悦の幸福であるとか、さう云ふものゝみではない。法悦の力も、永遠の幸福も無論考へるけれども、現在生活の上に於ては、パンの問題、物質の問題は最も直接的に必要なものであると云ふことを知つて居る。尤もその位のこととは凡夫でも知つて居る、況んや佛陀であるから、盛んにそのことに就ては教化を興へられた。その教化は雜阿含の中に（茲に阿含を引くのは、釋迦が全く言うたことを證明する爲に云ふのであります、後に佛教徒が附加へて言ふ次第ではない）この雜阿含經に、鬱闍迦と云ふ婆羅門が來て、お釋迦様に、現在の幸福と死後の幸福と云ふ問題を聞いた。釋迦が答へて云ふには、我が

教は何方どちも與へるものである、現在の幸福と死後の幸福とを保障せんとするものである。現在の生活は如何にして幸福が得られるかと云ふ話の時に、四つのことを説いて居る。それは第一は、生活をすると云ふに就ては、唯だ信心をして居るとか、徳徳を行つて居ると云ふことだけでは生活は出来ない、人生の物質生活の幸福は「種々の工巧より來たる」と書いてある、「工巧」と云ふことは色々な工藝技術を學ばなければならぬ、田を作るとか商賣をするとか、役人になるとか、學者になるとか、職工になるとか云ふ生活の方法に就て、人に負けぬ位にその技能を備へてかゝらなければならぬ。大工であつたならば、大工の中に於て他の大工に退ひを取らぬやうに勉強せよと云ふことを佛陀は教へて居る。學者となつたならば、ヘッポコヘッポコ學者でなく、立派な學者になれと云ふとを大いに獎勵するが故に、我が教に來たる所の者は、第一生活の基礎に於て安全を得べしと云ひ。第二には、その得たる所の利益を保護する方法に就て、酒を飲んだり、博奕ばちを打つたりすることを禁じて、得たる利益を大切にす美風を養へと説いて居る。さうして火事に會はぬやうに、泥棒に會はぬやうに人に騙だまされて取られぬ

やうに、得たる所の利益を自ら放蕩の爲に費すと云ふようなことのないやうに、利殖の方法を講じて、所謂勤儉産を治めると云ふ風にやつて行けと云ふことが第二である。第三には、常に善き先生を得て、精神的の訓戒を受け、又己れのやつて行く職業上の訓戒を受けて、精神の善導とそれから職業の指導を受ける事、それが身を立て、行く大切な心得である。それから第四には「正命」と云ふことである、決して不正なることをやつて生活をしやう、一時を僥倖しやうと云ふような狡すい考へはいかぬ、この人生の物質生活の安全を得るには、最も正しい考へを以て、堅くやつて行くことが土臺である。さう云ふやうな四つの事を守れば、それで物質生活の安全が得られると教へられた。

それから分度の制度を説くのでありますが、是は優婆塞戒經にも別譯雜阿含にも出て居ります。優婆塞戒經は非常に進歩して居りますから、後から色々なことが這入つたのだらうと云ふ議論もあるけれども、それは佛教を見ないから云ふのであつて、雜阿含にちやんとあることが、優婆塞戒經に出て來るだけのものである。分度の制度と

云ふのは大體斯う云ふことを説いて居る、別譯雜阿含でありますが、四つのことがあ
る。即ち前の雜阿含經にもありましたやうに、その業務に就て精勤する、その業務に
精を出して横着をしない。それから又自分の慾望を制限して無暗に酒を飲むとか、遊
ぶと云ふことなしに、自分のさう云ふ劣慾から來る贅費を省くやうにする。即ちそれ
には先づその業務上の修養を積まなければならぬ、職工ならば職工で、日本の職工の
やうに唯何の技能をも修めずして、ボンヤリして居つてはいかぬ。工業に従事する者
は工業の智識技能を學び、それからその働さに依つて利益を得たならば、その利益を
十分に大切にしなければならぬ。さうしてその利益の用途を四つに分けて居る。その
得たる利益の一部を以て生活せよ、即ち百圓利益を得たならば、二十五圓位の生活をし
て、さうしてその四分の二、五十圓は、自分の仕事を増して行くやうに、資本を倍加
して行くやうにせよ。残る一部二十五圓は貯金にして置いて、不時の必要に充てるや
うにしなければならぬ、即ち利益の半分を資金に加へて、盛んに營業をやれと云ふこ
とを説いて居る。而して世間の業務と云ふは、田を耕す事、商賣をする事、牧畜も許

して居る、それから家を造る大工、その他色々の仕事をズツと列舉致しまして、左様
なことは皆善い事である。さうしてその技術に熟達してやらなければならぬ。斯う云
ふ分度の制度を設けまして、利益を保護することを考へる。それから尙ほ茲に注意し
て居るのは、老人の所に金を預けてはいかぬ、不信用の奴に預けてはいかぬ、銀行に
預けると言うて居る、それも信用の無い所にやつてはいかぬ、能く調べて見ろ、又遠
方の銀行に預けてはいかぬと云ふうなことまでも注意して、得たる金を失はぬ方法に
就て、いろ／＼細かい注意を與へて居ります。

それからこの産業と信仰とに就ても、面白い説が幾らもある。「佛教徒であるにも拘
らず私は貧乏しました、どう云ふものでせうか」と云ふ、今でも能く言ひます。「あの
位信心したにも拘らず、あの家は大變零落した、どう云ふ譯だらう」と云つて不思議
がる人がある。「信心をして行けば御利益で榮へさうなものである」と言ふが。その時
に釋迦は答へて居る、それは我が教を守らぬからである、我が教は、信心さへしたら
ば商賣の事を怠つても構はぬとは言はない、商賣上に勉勵して行く上には、十分退を

取らないやうにしなければならぬと教へて居るのである。何故我が教の全部を守らないか、成る程信心するのは宜しいけれども、それは半分である。今の商工業に於て退を取らぬやうにやれと云ふ教訓を何故守らないか、その方が抜けるから家が潰れるのである。俺の教訓を守らぬが故に、潰れるのは當然であると言つて居る。處が今の大抵の坊さんはそれが分らぬ、「どう云ふものでございませうか」、「マア前の生に罪が深かつたのでせう」と云ふやうなことを言つて居る、その説明こそは甚だ不條理である。釋迦は、それは我が教を全部守らぬからそのやうになるのであると言つて居る。

一八 六損財業の訓誡

随つてその産を治めるに就ては、「六損財業の説」と云つて世に有名なことでありませうが、六つのことに依つて財産を失ふて行くことがあると警告を與へて、それに又六つ宛の失があることを説いて、三十六失を擧げて、この財を失はぬやうに警告を與へて居る。それは總べてを云ふと永くならずけれども、どんなやうなことを言つて居る

か、決して間が抜けたことを言つて居らぬと云ふだけの證據を示して見たいと思ふ。是れは長阿含の中に善生と云ふ者に對して佛が説法して居られるが、六損財業とは一つには酒に耽溺すること。二つには博奕、三には放蕩。四には戲樂。五には惡友と交はること。六には懶惰である。是れは餘り珍らしくないやうでありますけれども、この六つをそれ／＼詳細に説明して居る處を見ると、頗る適切である。第一の酒がいかぬと云ふのは何故いかぬと云ふに、酒は六つの失がある、財産を失ひ、病身になり、喧嘩好きになり、名譽がなくなり、腹立ちつぽくなり、智慧が減つて來ると云ふことである。是れは今進歩したる學問に依つて、生理的に研究しても、斯う云ふことはちやんと當るのである。それから——總てを言ふと永いからモウ一つ言へば、悪い友達と交つていけないと云ふことは何故かと云ふと、それは段々悪い友達の爲に、人を騙したりするやうなことを覺へて來る。さうして始終居る所が公々然たる會合などには出ないで、隠れたやうな所に居る、座敷には居らないで屏風の後ろに隠れると云ふやうな氣分になる。さうして自分ばかりではない、人をもその仲間に入られる爲に、段

々悪い仲間が殖えて、所謂愚連隊と云ふやうな工合で、悪い仲間を作る。それから他人の物を謀計たくらみを以て奪ふことを考へる、さうしてその仲間同士でも、利慾の事では喧嘩ばかりする。さうして人の悪口ばかり云ふやうになると云ふことが説いてある。非常に道徳上の教訓が能く現はれて居ると思ひます。

一九 佛教と遁世思想

それから尙ほ遁世と云ふやうなことに就ても、バツチヨ笠をかついて放浪生活をするが如きは非常な間違ひであると説いて居る。釋迦の時に丁度妙な親爺がやつて来て、法螺を吹いて「私は息子が家の商賣がやれるやうになつたから、モウ悉皆任かしてしまつて、さすらいの生活で、到る處飄然として歩いて居る。あなたが脱俗と云ふことを説くのはそれであらうと思ふから、私のやうな生活は、あなたが讚めて呉れるだらうと思ふて来た」と言つた。その時に釋迦がそれを非常な間違ひだと言つて攻撃して居る。「俺が脱俗と云ふのはさう云ふことではない、實際生活の業務をやりながら、強慾

に走つたり、沈溺したりせぬやうにと言ふのである、一切の業務を捨て、責任を回避して、ブラリ〜と遊び歩いて、到る處に寝轉んで居ると云ふやうな懶惰の生活漂泊の生活は決して許さぬ」と言つて大いに戒めて居る。今の誤まれる佛教徒のやる所のことは、全く脱俗を考へ違ひした、この馬鹿親爺と同じであつて、釋迦の前に行けば、大いに訓戒を與へらるゝ譯であらうと思ふ。是れも阿含の中に明白なる教として残つて居る。

二〇 佛教と中道不偏の教化

大體左様な譯で、今日は政治と言ひ經濟と言ひ、僅かのことには就いて申上げたのでありますが、佛陀の教化と云ふものは、要するに中道不偏を理想して居るので、餘りに物質的生活に流れてもいかず、又この人世を悲觀したりする婆羅門のやうな生活をも否定して、理想と現在の生活を一致せしめ、調節されたる統一の文明を發達せしめようとする着想である。それを劈頭第一釋迦が鹿野園に行つて、最初の説法の際に

言ふて居る、そのことはやはり阿含の中に出て居る。初めて鹿野園に於て憍陳如等の五人に向つて説法する時、單に鴈葢町にばかり這入り込んで、金あることを知つて道徳あることを知らぬと云ふやうな、ア、云ふことはいかぬ。又宗教だからと云つて、今の佛教徒のやうに、寺に引込んで木魚ボク／＼やつて居る、あれはいかぬ。この人世の眞ン中を歩け、彼等は即ち兩極端に走つて居るものであつて、甚だ不都合である。この人世に於て眞ン中を歩けと云ふことを説法しました。之を聽いて、「分かりました」と云ふて、五人の者が一回の説法に於て、直ぐ佛教の傳道者になつて、翌日は釋迦の教を四方に宣布したと云ふ位の簡短明瞭なるものである。であるから私は釋迦の思想が、決してこの政治經濟から懸け離れて居るやうなものではない、所謂一乗の教化と云ふて、現在のことゝ高い理想とを調和した所のものであつたと思ふ。それは仁王經の二諦品の説が明かである、一乗の教化と云ふことは何處にもある、阿含經にも今云ふ通り中道不偏の教化があるが、仁王經に言ふて居ることは非常に善い、二諦即ち世間と佛法、現實と理想と云ふやうな二つのものは、放つて置いてその儘それが一つに

なる譯のものぢやない、放つて置くとは現實の方は益々現實に出でんとし、理想の方は益々理想に走らんとするものである。是れは繪畫で言つたならば、寫實派と云へば寫眞見たやうになつてしまふ、理想派と云へば譯の分らぬものを描くやうに、二つの偏傾を取りたがるものである。政治家は政治ばかり考へて、道徳が分らぬ。坊主と云へば現在生活を忘れて、木魚ばかり叩いて居る。斯う云ふことの弊害と云ふものは、人間の馬鹿の頭には出來易いことである、我が教は、さう云ふ出來損ひの頭を直す爲に現はれたものであるから、我が教を奉ずる以上に於ては、その理解、その心得と云ふものが大事なのである。その心得に依つて、現實と理想とが調和されて行くのであるから、その現實と理想、世間と佛法と云ふものが、二つであつて一つ、一つであつて二つ、即ち之を混淆せず、之を分離せず、その一二の間に於ける玄妙に體達して、初めて茲に偉大なる勝義諦の教が立つのである。之を分離すべからず、之を混淆すべからず、その玄妙なる處を歩めと説いて居る。是れは實に至れり盡せりであると思ふ。さうして是等の思想は最も能く法華經の中の俗諦開會の文に顯れて居る。

俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん。

と言つて、即ち道德・政治・經濟・生活の全部と、而して大なる佛教とは、悉く一致することを説明して、「畢竟して一乘に住せしむ」と云ふことを説いた。日蓮の如きはその法華經の理想から起つて『立正安國論』を書いて、その主眼は「實乗の一善」と云ふことを主張し、それが『本尊鈔』には「天晴地明」と云ふことになり、『顯佛未來記』には日本の天職を説明して、大いに世界の文明に貢献するやうにと云ふことを説いた。總てその運用に於て、現在と理想とを分離しない。「天晴れぬれば地明らかなり、法華を識る者は世法を得べきか」と云ふことを盛んに唱道したものである。さうして日蓮は、當時の宗教家の誤解と政治家の誤解とを去つて、現在生活と宗教の理想の生活とを併せて之を教へて居る。故に日蓮の努力したる所は、今日の人の考へるやうに、宗教改革を叫んだ譯ではない、文明の理想に對する改善を唱道したものである。

第六篇 労働問題と佛教

一 緒言

労働問題が文明の建設に大關係を有するは、今更説明を要しないので、歐洲戰亂の結果一層火の手が盛んになつて居るのである、その甚しきは露西亞の如く國を擧げて壞亂の巷と化して居る。近時の電報を見ましても、露都二百六十萬の人口が、激減して僅か三分の一になつたと云ふことである、その多數人は殆ど行衛が分らぬやうなことで、どうして行衛が分らないやうになつたかと云ふと、喰へないから散りく、バラバラに散ってしまったので、随分烈しい状態である。それも畢竟労働問題の向け方が悪かつた爲に、さう云ふことになつたのである。又休戰條約の影響から、獨逸に於ても色々危険な思想が蔓りつゝあり、和蘭にも飛火して居るさうであるが、是れから色々影響が各國に及ぶのであらうと思ふ。デ日本も多少の波動を受けて、過般は米

騒ぎがあつた、あれで済んだかと云ふと、ア、云ふことは済んだのではない、一時鎮つただけのもので、その後伊勢の鳥羽と云ふ所に造船所があり、感冒かぜが流行つて感冒かぜ薬がなくなつた、造船所の労働者が感冒薬を買つた所が三十五錢であつた、定價表を見ると二十錢である。二十錢の感冒薬を三十五錢に賣るとはひどい奴だ、人の不幸をつけ込んで薬までさう云ふ都合な賣方をする」と云ふので、労働者が言ひ合せて造船所から歸りがけに軒別に商店を破壊したので、内務省から大海原と云ふ役人が出張をして調査した結果が新聞に出て居つた。諸君も御覽になつたらう、感冒薬一服で遂に鳥羽の町全體を、五時から八時に至る迄の三時間に、暴あやばれ廻つて、あらゆる商店を破壊したのである、さうして見ると、さう云ふ賣方をするのは無論悪いけれども、併し十五錢の問題で鳥羽町全體が破壊されることを思ふと、この問題は落着を告げたとは斷じて言へないのである。今尙ほ米が高いと言つて居るし、又職工の業を失ふ者も殖えると云ふことで、今日の新聞には砲兵工廠に於て四千人を解雇したと云ふ、大阪の工業界に於ても約二萬人以上の失業者が出來ると云ふことである。無論政府でも

色々心配して居られるが、随分労働問題はあらゆる事情に於て、今尙ほ心配の状態にあることは、言ふ迄もないのである。

而してこの事を適當に捌いて行く、即ち労働問題を引導して行くと否とに依つて、その國の興廢が分かれる、若し労働問題を遣り損なつたならば、他の方面に於て進んで居る國でも、内部の破綻よりしてその國家の進運を杜塞する、この労働問題を善く導いて行けば、戦後の商工業の競争にも勝利を占めるので今の處に於ては國家の興廢存亡に就ては、労働問題が一番大切な關係を持つと思ふのである。さうすると苟も國家の事を憂ひ、又多數の幸福を念とする所の宗教としては、この労働問題に關して何等かの意見がなくてはならぬ譯である。佛敎は古い宗教であつて、殊に近來のやうな工業組織のない時代に起つた宗教であるから、労働問題と云ふ名前て別にお經の中には出ては居らぬけれども、併ながら之を解釋するに就ての根本の思想、及び又その事實に當嵌める方法は、この廣大なる佛敎であるから、その標準が示されて居ることを私は信ずるので、その意味に於て労働問題と佛敎との關係をお話して見ようと思ふ

のである。

二 労働争議の病源

労働問題の根本思想としては、現代に押寄せたる政治、學問その他の文明の傾向が、自由競争と云ふことを是認した結果、現はれて來た現象であつて、政治上に就ては競争と云ふことは當然である、經濟上に就ても當然である。文明の進歩は競争にあるので、優勝劣敗である、弱肉強食であつて、強い者が勝つのであると云ふ風な思想が眞理として認められた。その根本は進化學、生物學から來て、總ての生物は適種生存である、優勝劣敗である。故に人間もやはり強い者が勝つて行くのであると云ふやうなことを是認して、政治及び經濟その他の事をやつて來た。それが國と國との間には強いものが弱い國を倒し、商賣の方に於ては資本の力の大きな者が勝つて、資本の力の弱い者が倒れると云ふ風になつて、飽くまでも競争を奨励した結果、國內には労働問題として現はれ、國と國との關係には戦争の火花が熾んに起つて來たものであらうと

思ふ。そこで是れに反對した思想、或る意味に於ては危険を帯びて居る所の社會主義などが唱へる所も、半面には一個の眞理があるのである。彼はと言ふのであるかと云ふと、人生は相互扶助である、互ひに扶け合つて行くことを原則にしなければならぬ、大體生物學の研究が間違つて居る、彼等動物の中にも中々優しい考へがあつて、互ひに扶け合つて居る事實を、クロバトキンと云ふ社會主義の學者が盛んに説いた。殊に人間には第四本能、即ち扶け合つて行くことと云ふやうな、社會共同生存の精神がある、共に扶け合つて行くと云ふことが人間の本領である。然るに従來の學說、政治が、單に自由競争、弱肉強食と云ふやうなことを認めた爲に、斯の如き悲惨な人生を作つたのであると主張する。さうすると此處だけで考へると、社會主義の方が扶け合ふと云ふので、非常に道徳性の主義である、現在の文明は全體その方針が、弱肉強食と云ふ——掴み合ひを認めるやうになるものであるから、そこで社會主義と闘つても斯かる弱點があるから、あらゆる國に於て遂にやられる。決して理由なくして露西亞に於て虛無黨が勝つた譯ではない、一方の考へに缺點があるが故に、遂に其處から突込ま

れて、多数の人間が社會主義に賛成するに至つたのである。それは獨逸に於ても社會主義が優勢だと云ふのは、やはりそれだけの考へがあつて、賛成をして居るものだらうと自分は思ふ。

所がこの根本の相互扶助と云ふ社會主義の思想、それから一般の現在文明の認めて居る自由競争と云ふ思想、この二つに對して佛教はどう云ふ立場にあるかと云ふと、佛教はこの二者は共に缺點ありとする宗教である。部分的の自由競争と云ふことは、無論如何なる道德も宗教も反對をしないのであるが、根本の原則を自由競争に置くと云ふことの間違は、佛教の上より見れば是れは明白なことである。佛は慈悲を以てその心とし、さうして人々をして菩薩の精神に立たしめるのである、さうしてこの天地宇宙を説明する場合にも、此處には温かき慈悲が流れて居ると説く。故に弱肉強食と云ふことは、是れは修羅の世界とか畜生の世界とかの定義と合して居る、俱相殘害と云つて、互ひに争うて掴み合ひをする、喰ひ合ひをする^{と云ふことは、畜生の定義として佛教では解釋されて居る。弱肉強食と云ふことが人間の常態だと云ふことは、佛}

經七千巻どこを明けて見ても無い「左様な状態は人間以下の畜生若くは修羅の世界なり」と云ふことは、到る處のお經に書いてある。さうすると現代の文明の認めた定義なるものは、佛教の教義から見れば、人間の世の中を修羅の世界とし、畜生の世界とすることを許したる思想であると言へる。故にさう云ふ思想は、根本に於て誤りがあるのであるから、之を訂正すべきは勿論のことである。又一方に社會主義が云ふ所の相互扶助と云ふことは、その言葉は甚だ美であるけれども、相互扶助の意味合が、非常に薄つべらで、そこに間違があるのである。扶け合ふと云ふことは何を扶け合ふかと云ふと、道德の仁愛の精神とか、宗教の慈悲の精神と云ふやうなことは見ないのである、社會の慈善事業……そんなものはいかぬ、宗教の親切……そんなものもいかぬ。人間の温かい感情……それなものも要らないと云つて、互ひに扶け合ふと云ふことは、左様なことから來るものではないと云ふのである。然らば何處から來るか、それは物資の配給と云ふことを言ふのであつて、問題は總べて麵麩の問題、馬鈴薯の問題であり、それ以外に於ては彼等は認めない「そんな親切なんと云ふような鈍間なことは、

どうしても宜い、それは古い頭だ、親切があるならば、即ち金持が持つて居る錢を吐き出せ、品物を餘計持つて居る者は、その品物を出せ」と云ふのである。出さんければ引奪くる、引奪るのではない、取返すのだと云ふ、さうして到底これは話し合ひではいかぬから、ど突き回して取れ、さうして金持を保護する所の軍隊も倒せ、國家の法律も破却し、今日の世の中を蒔き直して、さうして總べて平均すると云ふことに於て、初めて扶け合ふと云ふことになるのであると云ふ。その主義も馬鈴薯に限つて居るし、やる所も撲り倒してやると云ふやうな方法であるから、扶け合ふと云ふ言葉は一應は立派だけれども、扶け合ふと云ふよりも、ど突き合ふと云ふことが先きになる。故に社會主義の扶け合ふと云ふ言葉は、美であるけれども、事實に於ては破壊主義である、混沌主義であると云ふことに定義が下されて居つて、實は社會主義と云ふ言葉は當嵌らぬのである。社會全體の幸福を考へない、社會主義の原理は、己れ自身に絶對の權利があり、絶體の自由がある。天地間に現はれて居る總てのものは、皆己れ自身が之れを自由にする所の權利を持つて居る。世の中に出來る馬鈴薯は、まるきり一人で喰

ふ權利があると云ふやうなことを原則にする。それが皆誰も彼もが、總てを自分が自由にする所の權利ありと云ふことを原則にするから、互に扶け合ふとか何とか言つても、多數者が各々自分の所有ぢや、自分の所有ぢやと云ふことになるから、そこで強い者が撲り倒すと云ふことなつて來る。今日露西亞が社會主義を實行したと言ひながら、どう云ふ風になつて居るか云ふと、彼は自由を叫んで置きながら、非常な極端な壓迫を以て殺戮を行ふて、反對派に對する態度と云ふものは、實に暴虐無道、何の裁判もしなければ法律に據らずして、引捕へて直ちに慘殺すると云ふ方法を彼は用ゐて居るではないか。何故斯様な亂暴なことが出て來るか云へば、根本の頭が本統の道德的の慈悲でない、自分の利益を立場にして、自分の意思に任かして行き居るから、自分の都合を飽く迄も主張する、他人の都合は構はないと云ふ。自分が壓迫される時分には石を打つけるけれども、自分が權利を得たならば他人を取捕へ叩き斬ると云ふことは、それは他人を斬るのだから構はないと云ふ。さう云ふ出來損ひの相互扶助と云ふことは、實に邪説の極點であり、全く世を毒する暴論である。

左様な邪説は無論問題にならないけれども、一方の弱肉強食と云ふことも、是れ亦實に失敗の激しい言葉である、何處からでも突込まれる、素ッ裸で飛出したやうな思想だから、何處からでも疵を受けねばならぬ。そこに又一方が今云ふやうな極端な個人主義に、社會主義と云ふ嘘の名前をくつ付けて飛出したから、そこで俺の所有だ、俺の所有だと云ふ奴が出會はして、その慾張りが打つかつて、落付く所は社會主義も弱肉強食と同じことになつて、強い者が勝つ、労働者が多數だからそれが石を打付けて、金持を壓迫する、社會主義の組織したる文明は、確かに弱肉強食の社會である。先きには權力を以て軍隊を支配して居つたが、今度は多數の腕力を以て世の中を支配すると云ふのであつて、そこに道もなければ法もない。故に社會主義などは無論佛教から見て否定すべきである、ア、云ふ思想は佛教の御經の中にも色々論じられて居るが、それは惡平等の思想と云ふものであつて、物が平等であると言へば、搔き混ると云ふやうな考へは、非常な間違であると言つて、さう云ふ平等には罪惡と云ふ名前が附けてある。社會主義の平等は佛教の教理から見ると、罪惡性である。尤も佛教を學

び損なふと、あれに似たやうなものも出来るけれども、それは坊主の間違であつて、決して佛教本來の教義ではない。

三 佛教教義の主張

然らば佛教の立場は何處にあるかと云ふと、是れは無論一般の人格を認める、總ての人々の尊いことを認めると同時に、この現實の社會には秩序あることを認める教である。故にその原則は『四恩の説』となつて現はれて居る。是れは御承知の通りであつて、人は互ひに恩があると云ふことを説いた、衆生恩と云ふことを佛教は盛んに言ふ、「袖振り合ふも多生の縁、縁はいなもの味なもの」と云ふことは佛教から出て居る。この縁と云ふことを、説いて、同じ人間に生まれて地球の上に棲息をする以上に於ては、是れ皆縁あつて此處に生まれて居る所のものである。さうして共業縁と云ふことを説いて、共同の因縁によつてこの世の中に出て居るので、互ひに救け合つて世の中を組立て、行くべきものであるから、見ず知らずの者でも皆恩あることを力説する所

のものである。殊に四恩の説の中には労働問題に就ては、明かに現在の資本家が労働者をいぢめて居るやうな有様を罪惡として説いて居る。どう云ふ風に説いて居るかと言へば、即ち利益と云ふものは共報きやうほうなりと云ふことを、法華部の中の尼乾子にけんし經に説いて居る、共報と云ふのはどう云ふ意味かと言へば、此處に千圓なら千圓の利益があると云ふことは、その利益は資本の力と、労働の力と、それに關係して居る技師の學問の力と、さう云ふものが寄つて出來た所の結果であるから、その利益は資本家が獨り勝手にすべきものでないと云ふことを原則にして居る。所が今日労働問題の起るのは、その得られた所の利益の配分方法の權利を、株主だけが持つて居り、千圓儲かつた中八百圓を、之を二割なり三割なりの株の利子として引奪つてしまつて、あとの残つたものだけで労働者の給料などをやらうと云ふことになる。その引奪り工合に資本家に無理がある、日本でも三割の配當であるとか、五割の配當であるとか云ふことを言ふが、さう云ふ配當と云ふものは決して正當なるものではない。慾に限りがないから、向ふの方が五割だと云へば、此方は七割だと云ふやうなことを云ふけれども、そんな

に一年の内に利益を得らるべきものでないのである。所が近頃日本の商業界の状態は、大抵良い會社と云ふのは七割、八割の配當をする、甚しきに至つては六十割の配當をして居る會社がある。六十割と云へば百萬圓のものが六千萬圓を一年の利益として分配するのである。十圓出して居る者が六十圓入つて來る、泥棒見たやうな商賣である。さう云ふことを見せつけて、それが成金風と云ふやうなことをやるから、一日に七十錢や八十錢貰つてグウ／＼云うて居る労働者が、馬鹿ばか臭いと云ふ感じを起すやうになつて來るので、この労働者の不平の精神を挑發する所のものは、この資本家が餘り利益を貪り過ぎると云ふことが第一の原因である。所が佛敎に於ては、それはこの『共報』と云ふ二字で既に説明し終つて居るので、さう云ふ者は釋迦様は牢の中に叩き込んでしまへと説かれてある。親不孝と、君に不忠なる者と、天地の恩を知らぬ者と、労働者を壓迫して資本家のみが我儘なことをする者とは、これが一番の罪惡の根本である。法律は素と道德から出て居るものである、何故に刑罰を科して牢に入れるかと言へば、それは不道德なることであるから、その不道德なることを法律が取締る場合

に、牢屋が出来て居るのである。だからこの労働者を壓迫して資本家のみが我儘をする奴は、取捕へて牢の中に打込めと云ふのが佛教の教義である。

四 労働問題の善導

併ながらそこに注意すべき所がある。西洋の方に於ては資本と労働を階級戦争と號けて、資本家階級、労働者階級とに二別し、敵味方になつて喧嘩をして居る。このことは根本に間違つて居る、西洋が如何に辯護しやうが、同じ國の中に居つて仕事をして行くのに、労働者が資本家を敵とし、資本家が労働者を敵とすると云ふやうなことを認めて來たのが、根本の間違である。一の會社をやるには、資本も大切であり労働も大切である。一軒の家で云へば亭主も大切、女房も大切と云ふやうなものぢや。それが亭主と女房と喧嘩して、取ッ組合をするものだと云ふやうなことを前提として、やつて家を作つたならば、それは失敗の源である。然るに資本と労働とは敵對のものと西洋では是認して居つた。この是認するのはそこに一つ尤な所がある、それは資本家

は、なんぼ云ふて聽かせても分かるものぢやない、金持と灰吹は溜るほど穢ないのだから……逆も言ふても分らぬ、彼等は石を打附けるなり拳骨でドヤして、癩でも拵へてやらなければ性根がつかぬと云ふ。併ながら私はこれは西洋の資本家はさう云ふことであるか知らぬが、元來日本の金持になる人は、昔から温情主義と云ふか、道徳性と云ふものが進歩して居ると思ふ。暖簾のれんが古くなつたと云ふには、殆どその家では利益の如何より、暖簾に疵をつけちやならぬと云ふことの方が主になつて居る。それはその人を擧げれば幾らもあります、相當なる名譽を博して居る資産家と云ふものは、自分の家に使ふた者は必ず身を立てるやうにしてやらうと云ふことを原則にして、算盤は第二であつた。それであるから今日でも日本の良い資本家は、やはりさう考へて居るであらう。何方かと云ふと日本は少し身分があれば、餘り金錢などは大切にしなかつた。それは一方から言へば日本の弊害であつたのである。そこで西洋の眞似をして、慾張り根性を養成しなければならぬと言つて、慶應義塾などて實利主義と云つて、人間慾張り〜と云ふものだから、慾張らぬければ相濟ひまいと思ふて、少し眞似をし

たに過ぎぬ。元來生地は慾張らぬ所の國民なんてある。であるから西洋のやうに労働問題は難かしくはないと思ふ、今迄の所はつい西洋かぶれして居つたから、資本家もやはり慾張らんならぬものと思ふて、真似をして居つたけれども、生地はさうではない。さう云ふ風に導き得るものであるから、西洋のやうに資本と労働が敵對行爲を取ると云ふことは、佛教では許さぬ。やはり労働者の人格を認めるのみならず、資本家より言へば、働いて呉れる者があるから、會社が立つて行くのである。そこで労働者に恩ありと云ふ考へを以て資本家が臨むのである。此處は諸君の能く聽かねばならぬ所である。労働問題の一番やかましいのは、労働者の人格を認めて「彼も人の子あれも人」と云ふことを、認めるか否かと云ふことがやかましい。所が中々西洋人と云ふものは變な差別の頭があつて、口では人道だの正義だのと云ふけれども、奴隷を扱つて來た悪い習慣が附いて居る。日本人は昔から決して奴隷と云ふ者を扱つたことはない、自分の家のおさんどん等をひどいやうに使ふ者もあるけれども、やはり家に置いて見ると可愛ゆいと云ふことになつて、お寺の下男なんかでも、年とつて役に立たぬ

やうになつても、「マア爺や、心配せずに居れヨ」と言つて可愛がる風がある。日本人は優しく生れて居る。であるから日本人は奴隷を扱つたことはない、西洋の方に於ては素と奴隷から商賣を始めて來た習慣を持つて居るものであるから、どうしても労働者に對してこれを奴隷視する考へが抜けなかつた。そこで労働者の方が團結をして、之を毆倒してとら／＼癪を拵へて、「これで性根が入つたか」と云ふやうな途を取り、漸くこの頃資本家が「これは兜を脱がにやならぬ」と云ふことになつて來た。それが西洋の有様である、日本はさうではない、奴隷を扱つた覺えがないから、人格と云ふやうなことは、東洋の方に於ては餘り言ふ必要がないと思ふ。而已ならず恩を認めると云ふ思想は、労働問題に於て世界にない、佛教が獨り之を教ゆる所の飛切の議論である。資本家は労働者の人格を認めるところではない、あれが働いて呉れれば、この會社が立つのである、吾々も利益の分配に與かるのであるから、有難い恩人であると言ふて、その會社に働いて居る職工を、資本家が恩人として待遇すると云ふ觀念である。その代り労働者も資本家は敵だと云ふようなことを考へてはならぬ。兎にも角に

もその會社に働く仕事があつて、生活して行けるのであるから、資本家はやはり自分の恩人であると言ふ考へを以て、石打附けたり何かしてはいけないと言ふのである。それで今西洋の議論に依れば、幸福主義であるとか、温情主義であるとか云ふやうな問題に聽いて居るが、即ち労働者の幸福を増すと云ふことを前提として考へなければならぬとか、或は資本家が温かい精神を以て労働者に臨むと云ふやうなことを云つて、それで議論して居るけれども、私はさう云ふことで喧嘩する必要はないと思ふ。温かい精神を以て臨むも臨まないもない、之を恩人として認めるのであるから、温情主義と幸福主義も人格主義もこの中に攝せられる、恩人と云ふ一種特別なる思想を以て佛教は之を導くものである。随つて労働者も資本家に對して、之を恩人として認めるのであるから、今世間で論じて居る温情主義、幸福主義、人格主義の如きは、この報恩主義の中に統一せられて、適當に發見するのである。根本的の大道徳觀念に立つて、労働問題を指導するものは佛教である、と云ふことが言へるのである、そこが報恩主義が私に良いと思ふ、大事な議論と云ふものはさう長つたらしい面倒なものぢや

ない、根本の着想を一つ極めさへすれば、一切の解決が附くのである。

五 幸福増進の方法

尙ほ進んで考へて見ると、労働者の幸福を増進する方法としては、第一は國家の力によつて社會政策を行ふて、労働者の幸福を進める事、第二は資本家が色々労働者の爲めを圖つて設備をして、労働者の幸福を進める事、第三は労働者自身が組合を作つて自分の幸福を増進することであるが。そこで佛教はこの三者に就てどう云ふ立場を取るかと云へば、國の力を以て憐れなる人間を救ふ方法を取れと云ふことは、お釋迦様があらゆる國王に對して到る處で説法された。政治の本體と云ふものは唯理窟ではない、道徳性なるものであるから、十善の行ひをして、王様となるには正しき法を世に起し、大いに世の中に施しの精神を起してやらなければならぬと言つて、王は十善と云ふ。王様になつて居る者は、素から道徳を行ふことが好きな爲に、王様になつて居るのであるから、一國の王様は人民の幸福を圖る爲に、大いに仁政を施さなければ

ならぬと云ふことは、到る處に説いてある。

それは轉輪聖王の思想も人民の幸福を基にして居るので、全體お釋迦様自身が王様であつて、一面には王たる者は我が説く如く、斯う云ふ親切を以つて大勢の者を根本から救はんならぬけれども、政治では魂の底までは救へないから、せめては生活問題は政治の方に於て救へよと云ふは論のないことである。故に國家が社會政策を行はんならぬと云ふやうなことは、佛教を御覽になれば無論のことである。何も西洋の議論を待つ迄もないことであつて、即ち仁王經と云ふて、王様には仁政を施すことを説いて居るお經もある。又さう云ふやうなことはあらゆるお經に出て居る。

次に資本家が勞働者の利益を圖ると云ふことも、これはもう無論のことである。凡そ佛教は富める者は貧しき者を憐み、賢き者は愚かな者を導き、社會の上に立つ者は下の者を引立てると云ふことを菩薩行として、佛教を信ずる以上皆この菩薩の行に這入れと云ふことを獎勵するのであるから、資本家でなくとも凡そ社會に存在して居る限りに於ては、何事に就てもそこに扶け合つて行く所の精神が根本の教義である。お

釋迦様の教によれば、錢を溜めて慾張れと云ふことはどうしても出て來ない、資本家である以上は唯だ金ばかりに眼をくれるな、金ばかりに精神を囚はれれば、形は富むと雖も心は貧しき者である。世の中は精神に依つて行かなければならぬと云ふことを盛んに説くのである。波斯匿王とか、首達長者とか云ふ金持の人が信者になれば、直ぐその日から大勢の者の爲に施行と云ふことをした。て佛は常に信・戒・施・慧と云ふことを説いて居る。信仰と道德と施しと智慧とである。佛教徒は信心が大事である、道德も大事である、道德の中にも別出して施しが大事である、智慧が大事であると言つて、信・戒・施・慧と云ふことを説くのである。故に有力なる長者等が佛教徒になれば、入信の日、即ち佛教徒に加へて貰つた歡喜よろこびの日に、直ちに惠施を舉行して居る。それから奴隷を解放してやる、波斯匿王あたりは毎朝奴隷の市の立つ所に行つて、さうしてその奴隷を買つて、奴隷に三歸依を授けて解放をして居る、それから釋迦自身が國王の息子でありながら、鐵鉢を取つてさうして四民平等を主張して、如何なる卑しい所の毘舍びしゃ、首陀と云ふやうな、社會の下層に押込まれて居る者の所にも、

頭を下げて行つて、ちやんと托鉢の行をした。是れは人には階級はない、身分の表面から見て色々階級があつても、人は徳を積みぬ限に於ては、如何なる者と雖も値打がないと云ふ。この非常な高い教を以て、カストの制度を改善したのが佛教の大運動であつたのである。カスト即ち階級より來たる奴隸制度の廢止、それから又一般の窮民の幸福を増進する爲に、施しの思想を鼓吹した、憐れな女などの所に行つても、阿難尊者が摩鄧伽と云ふ婦人の所に行つて、大いにその婦人が社會から壓迫されて居るのを救済した。今の佛教徒のようにポカンと指をくはへて労働問題は西洋のことである、佛教は木魚、ボク／＼だ。さう云ふことはあるべきことではない、釋迦は盛んに文明の創建と社會救済の事業に従事したものである。故に増一阿含の初めに、佛弟子、信者等の働いたことが説いてある所には、今の所謂社會救済の事業、今の所謂労働問題と云ふやうなことに従事した人が、一パイ書いてある、女もお婆も皆働いて居る。それであるからさう云ふ意味に於て、資本家が労働者の幸福を圖ると云ふことは無論のことである。

それから労働者自身が幸福を増すに就ては、西洋でやるやうに團結を組んで資本家を敵として闘ふやうなことは、佛教は認めて居らぬけれども、自分自身の利益を圖ることが強ち悪いことでもないから、適當な方法に依つてさう云ふ組合を拵へて行くことに就て、何も佛教は反對をしない。けれども、西洋の思想のやうに、労働團體は戰闘團體なり、團結を作る目的は資本家と闘ふのである、石を打つるのであると云ふやうなことであるならば、それは佛教はその點に於ては反對を表しなければならぬ。それは石の力を以て資本家を覺らせるよりは、やはり世に教を盛んにして、教化の力を以て金持の頭を直すやうにしなければならぬ。それで釋迦は教化の力に重きを置いて居る、石を打つける力を以て人を善良にすると云ふやうな方法は、是れは動物を教育するのには、尻を叩いてやるが宜いか知らんけれども、人間を善良にするには、石を打つけたり短銃を以て脅かしてやらなければならぬと云ふことは無い、釋迦は人間を左程に劣等な者と見做して居ない。如何なる惡逆無道なる者でも、教ゆるに道を以てすれば必ず化すると云ふことを原則として釋尊は教化を重んじた。故に西洋の労働

團體が、富豪は石を以て打つてなければ性根が覺めないと云ふて、富豪を動物と見たと云ふこの考へには、佛教は同意することはどうしても出来ない。その代りに労働者それ自身が如何に凶暴なる精神を持つて居らうが、如何に暗愚なる頭であらうが、教ゆるに道を以てすれば是れ亦教化せらるゝものと信じて、労働者の人格に對しては法華經の不輕品にある通り、如何なる者でも手を合せて拜んで「我れ深く汝等を敬ふ、敢へて輕慢せず」と言つて居る。この菩薩の行を以て佛法の教として居るものであるから、如何に垢づいた労働服を着て居らうが、鼻たらし居らうが、人間の本質には尊い菩薩の行を積んで佛に成り得るとまでに、尊敬を拂ふ所の教である。

六 労働問題の歸結

世の中には、労働問題は西洋に起つた問題だから、西洋風に解釋しなければならぬと思ふて居る人があらうけれども、西洋では労働問題をやり損うて居る、西洋が労働問題に於て溝に嵌つたからと言つて、日本も一遍溝に嵌つて來なければ味が分らぬと

言つて、さう云ふ真似をする必要はない。確かに西洋の労働問題は失敗であるし、現に失敗を繰返して居る。何も日本の労働問題は、左程に差迫つて居るのでないから、心靜かに亞米利加はどうだ、英吉利はどうだ、皆よく前途を見届けて行つたならば、露西亞なら露西亞でも初めあれが出來上つた時には、「出來した」と言つて亞米利加の大統領はじめ祝電を送つたけれども、今になつて見れば祝電の取消しだらう。賢明なる大統領すらも祝電の取消をせんければならぬやうな周章てた態度は見つともない。日本人は一平民たりと雖も、この社會問題に周章てて祝電を送つて、半年經たずして取消をするやうな不態な不謹慎な態度は取らぬ。何も西洋のやり居ることが、さうえらい事ばかりではない、祝電を送つて置きながら今になつては眞に困ると云ふ。それから又餘り危険思想が彼方此方に蔓つては困ると言つて居る。私心を基にして物を判斷するやうな者は、結果の善良なる氣遣ひはないのである。御都合から判斷をする。今の處では斯うやつて呉れたら宜いが、餘り行過ぎても困ると云ふやうなことを言つて、本來主義に賛成するのではない、自分の利害得失を根原に置いて、表面を道德の

言葉に借りて居るやうなことは、何の價値もないのである。

兎にも角にもこの労働問題に就ては、日本人は慎重なる態度を取らなければならぬ。西洋に於ては労働問題起つて以來凡そ百三十年、未だ善良なる解決を告げて居らぬのであるから、何も日本人が今頃周章する必要はない、日本は漸く労働問題が起つて、二年か三年にしかならぬ。之を百三十年研究する迄には、未だ／＼緩くり出来る、少しもバタ／＼することはない。

然らば日本人が石を打附たり何かするのはどう云ふ譯かと言へば、是れは國民を教へざるが爲である、今の日本の弊害は、労働問題を解釋して居らぬが爲と云ふよりも、労働問題は未だ左程に差迫つては居らぬ、多少は資本家の中に悪い者もあるから、訓誡を加へなければならぬけれども、それとも言ふて聽かせないで、慾張れ／＼と云ふことを教へたからである。經濟學の方に於ても慾張れ、政治の方に於ても慾張れ、國を擧げても慾張るに於ては何の遠慮があるものか、と云ふのでやつたからである、今でもさう思ふて居るだらう。何も當り前の法律に觸れぬ程度に於て、慾張るのに差

支があるか。これが主義となつて居るやうな譯であるから、今頃、奸商と言ふけれども、あれが激しくなつて來たから奸商と認めると云ふけれども、實は皆奸商の卵ぢやないか。その商業が少しく發達すると之を奸商と云ふ、大體人間の頭と云ふものが、皆慾張り根性になつて居る。私は決してさう云ふ矛盾したる思想を以て、社會を健全な理想的文明に導くことは出来ないと思ふ、大體が經濟學の根本に於ても、モウ些つと經濟の總論に於て、道德、宗教の價値を認めて、この經濟學の學說にモツと深い道德、宗教の思想がなければならぬ、今の經濟學は總てが失敗だと思ふ。政治に於てもさうである、政治は權利ぢや義務ぢやと云ふけれども、政治の本體は道德、宗教の思想から離れた時に於ては、政治全體が失敗ぢや。だから政治總論の所には、必ずや道德の思想宗教の思想を打込まなければならぬ。是れが大事なことである、今帝國大學に於て法科をやる人が道德の觀念、宗教の觀念を如何に見て居るか。さうしてその方から出た人が、あらゆる役人になり會社の重役になるから、頭が道德宗教と關係が切れて居りはせぬか。それが爲に社會の各方面に於て、あらゆる紛雜したる状態を呈し

て來た。激しい話のやうであるけれども、靜かに考へたならば、確かにさうではあるまいか。この間も汽車の中で或る博士に出會つたが、さう云ふ話をしたら非常に同感のやうであつた。又汽車の中で法曹界の大家と話した時にも同感であつた。どうしても學生の頭から直さなければならぬ。帝國大學の教育の根本から直さなければ駄目だと云ふことは、最早一國の定論であらう。

斯くて社會はどうしても一つ考へ直さなければならぬ、大いに根本の思想を改めなければならぬ。今までに仕來つた所の文明の理想、多くは唯物的思想、科學萬能の思想を基にして流れて來た所の思想と、それで學んだ所の政治學、經濟學、社會の組織と云ふものは、茲に鼻を突いたのである。是れがどう云ふ聲になつて現はれたかと云ふと、永遠の平和、民族の獨立、互ひに世界の人等が幸福を得るやうにと云ふ聲になつて、今度の平和會議に現はれんとして居る。人道と云ひ永遠の平和と云ふ言葉は、今迄押寄せて來た失敗に氣づいて、どう建て直さうかと云ふ問題である。この場合に無論色々議論も出ることであらうけれども、どうしてもその根本なるものは政治學の

根本を直ほし、經濟學の根本を直ほし、それから西洋人で言へば人種の僻見——人道と言つた處が、東洋人に對する所の待遇を別にする、亞米利加あたりの人が幾ら人道、正義を唱へても、やはり東洋の人は低いものだと言ふ考へを持つて居る。今日の新聞にも出て居つたと思ふ。日本の講和使節は、第一に世界の人種を平等に視ると云ふこの大理想を歐米人の頭に吹込まなければならぬ、西洋では、色の着いて居る人間はどうしても劣等ぢやと云ふ頭を持つて居る、併しそれは非常な間違である。何れにしても私は西洋人のみが勝利を得たる文明であつたならば、非常に危険なものがそこにありと思ふ。ふ少なくとも東洋の文明を加へて——西洋の文明も尊重しなければならぬが、東洋には四千年間に發達したる所の大なる文明がある。この東洋の文明を愛護して、西洋の文明と適當なる調和接觸を取つて、善きを探り惡しきを捨て、完成したる偉大なる文明を作ると云ふ所に、歐米人が先づ自覺せなければならぬ。言葉を換へて言へば、歐米人の慢心の鼻と云ふものを折らぬ限りには、人類全體の幸福は來らないのである。彼は人格の上に於いては、歐米人が優秀なる人種であると云ふ所の自惚根

性が強過ぎて居る。宗教に於ては基督教が卓越したる宗教として、東洋の宗教などは顧る價值なしと自惚れて居る。随つて道德に於ても西洋流の個人主義であるとか、社會主義と云ふものゝみが、えらいものであつて、東洋に發達したる報恩主義、四恩並行、仁義忠孝等の光輝ある道德の價值を彼等は知らぬ。一遍には分かるまいから、兎にも角にも分る迄は東洋の文明を日本が擁護して、さうして彼等が了解する迄維持して、進んで人類が東西兩洋の文明を理解するやうに努力するが、我が日本國民全般の唯一の天職である。今迄吾々の先祖が三千年四千年の間、生命を捨て、擁護したる文明の長所は何處までも維持せなければいかぬ。この點に於ては私は西洋人は西洋の文明を愛護する力が非常に強いと思ふ。東洋人は東洋の文明を愛護する上に氣が抜けて居る。東洋人は東洋の文明を愛護して立たぬならんと云ふ自信力が頗る少ない。若しそれが強かつたならば日本の神かみながらより流れたる國體及び日本の文明、支那の周公孔孟聖賢の築いたる文明、印度の佛陀が築いたる佛教の文明、その他東洋の風俗習慣に流れ居る偉大なる文明と云ふものは、十分に愛護しなければならぬのではないか。何も

宗教的僻見でなくても、佛教の中には偉大なる哲學があり、道德があり、宗教があり、あらゆる教訓がある、この世界の文明の寶庫と名付くべき佛教に對して、東洋人はモット強い所の愛護心を有せねばならぬ。自分の方にある斯う云ふ尊い寶を忘れて、さうして西洋文明に涎ばかり流して居ると云ふやうな態度は、吾れその賢なる所以を知らずである。

私は労働問題に就て、労働者自身が自分の利益を謀るには、西洋流の労働團體などを作つてやると云ふことは考へものである。尊る今の處害あつて益が無からう。故に労働者の幸福を圖るに就ても、餘程能く研究を積んで、徐ろに方法を案出したならば宜からうと思ふ。要するに先づ労働者が團體を組むより、資本家が先きに覺めることである。資本家を覺さすには石を打つけるより、教化を熾さかんにして、精神的に資本家を覺らしめ、又國家をして社會政策を實行せしめ、政治學經濟學の根本より改めてかゝり、東洋文明を愛護する根本の着想を立て、以て完全なる解決を學ぶべきであると思ふ。

第七篇 日蓮聖人より何を學ぶべきか

一 緒言

近來日蓮聖人に對する研究は段々進んで参りまして、聖人のどう云ふ處が吾々の模範であるかと云ふことは、略々世の中に知れ渡つて來たことであると思ふ。殊に天晴會員の如きは熱心なる研究者であつて、聖人のことは大體御承知になつて居ることである。故にモウ自分が新らしく斯う云ふ題に就てお話することは、殆んどその必要を認めないのであるが、會員諸君の爲と云ふよりも、今の時代の思潮に對して、吾々日蓮主義者がどう云ふ態度を執るべきかに就て、聊か自分の考案した所を申上げて、日蓮主義者の思想運動の態度を決する、御參考に供したいと思ふのであつて、諸君を對告衆としてお話するものゝ、實は今日の日本の國民を對手として、聊か所見を開陳するのである。

日蓮聖人より學ぶべきことは、人格の方面に就ては有らゆる美點が整ふて居るので、是も最初は聖人の剛毅な側であるとか、或は聖人の忍耐の側と云ふやうな、部分的の徳性を讚歎する人が多かつたけれども、今日に至りては、聖人には各方面の徳性が完備して居ることを認め、全き人格を大成した人として尊敬して居る、若し人格の上よりして學ぶならば、多々學ぶべき點があるのであつて、殆んど有らゆる抽象的に研究したる徳目が、全部日蓮聖人の上には人格化せられて居るものである。故に今更人格の美點に就て一つ二つを取出してお話することは、今日にてはその必要は存しないと思ふ。又第二に主張の側に就ても、聖人の主張が、佛教を日本化した特長を帯びて居るとか、又多くの佛教が持つて居つた弊害、厭世的、悲觀的、獨善的と云ふやうな、他の思想家から非難されるやうな點は、悉く日蓮聖人の主張に於ては除き去られて居るのであつて、寧ろ現代人が理想する所の積極的であり、又現實と能く調和して人生の實際の力となつて行く宗教であると云ふことに就ても、多くの日蓮主義者に依つて明瞭に闡明せられたことである。その他の側に就ても、日蓮聖人の色々の思想の方面は、

殆んど遺憾なく紹介せられ訖つたと信ずるのである。即ち人格と主張の二方面に於て、聖人から學ぶべきことは、已に完了を告げて居るやうな事になつた爲に、この天晴會に於ては、日蓮主義の應用の方に進んで、實際の問題と結び付けて研究をするが宜からうと云ふことで、世界各国の國民思想と日蓮主義の關係を論究することに移つて、それも既にそれ／＼の講師が、或は露西亞の國民性と日蓮主義、獨逸の國民性と日蓮主義、それから更に他の國民性に對しても、各國の思想と日蓮主義の關係を見ようとする研究が開かれて居つた。それ程なことであるから、今更自分がその主張なり人格なり的一端に就て、學ぶべき點をお話することは、恰も研究の退歩のやうな事である故、是は私は致したくないと思ふ。さうすると最早何も申上げることには無いかの如くであるが、併し今の日本の思想界に對しては、茲に新らしき意味に於て、謹んで聖人から學ぶべきことがあらうと思ふので、この點に就て愚見を開陳する次第であります。第一に學ぶべきことは、

一 思索の態度

と申しますか、「態度」と云ふだけでは言ひ現はし得ないのですが、適當な言葉を考へつかないので、「態度」と云つて置きます。その思索に就ての外部から考察する態度と、それから思索の内容に這入つて決定する態度とに就て、多くの學ぶべき點があらうと思ふ。

先づ第一に思索に就ての熱誠が確かに吾々の模範になると思ふ。幸ひ今日は我國に於ても、思想問題が勃興して、思想の研究に熱心の度が加はつて來たのは、洵に慶すべきことと思ふが、日蓮聖人の思索に對する熱誠は、最初は唯だ何となく「日本第一の智者となさしめ給へ」と云ふ祈願であつたけれども、段々進んで行く所には、鮮かに思想が一國の興廢に關する、又佛教と雖もその思想を誤れば地獄に墮つると云ふやうに、思想の如何に因つて一國の興廢存亡が岐かれ、一人の永遠の浮沈が決すると云ふことも、非常に強く考へられたのである。國を愛するには色々の方面があるので、外部の

制度を以て國を進めなければならぬとか、或は軍備の方から進めなければならぬとか、是は何れも愛國の美舉であつて、日蓮聖人は無論さう云ふ側も認めるのではあるけれども、何よりも一番大事なのは思想である、國家の外形は如何に整はうとも、制度が如何に整はうとも、若しも人心を支配する思想が純正でなかつたならば、終ひにその國は危ふくなると云ふことを標榜して、極力思想の側より國家の興隆を圖らうとしたことは、一々の證據を擧ぐるまでもなく、殆んど聖人の遺文全體を貫いて居る所の主張である。この意味をどうか我が國民に領解せしめたいと望むは、日蓮主義者の豫ての宿願であるが、昨今に至つて、この領解が識者の間に起つて參つたのであります。

明治維新の宏業より今日に至る迄の、國家的活動は、總べて國家の形體に屬するごととて、第一法律の上に就て條約改正と云ふやうなことが、非常に大事であつたから、どうしても日本の國をして世界的地歩を占めしむるには、法律を完備せねばならぬ。又新らしき武器が發達して來たから、それに負けぬやうに軍備を整頓せねばならぬ。或はその他教育なり、科學的の學問なり、有らゆる事柄を整備するに就て、愛國的の活

動が起つて居たのである。無論その當時にも、思想を全然忘れては居らぬけれども、思想と云ふやうなことは、國家の興廢には第三、第四に屬することであつて、左程重いと思はなかつたのが、一般人の考であつたと思ふ。所が先年大逆事件が起つた時から、少しく思想の恐るべきを感じた、あれは所謂大逆であつて、直接爆彈を取つて 至尊に向ふと云ふやうな者が、我が國民の中にも發生したので、調べて見れば他にも傳播性を持つて居る。又文明を破壊すべき考を以て、大逆の他面には都市破壊の計畫をもして居つた、實に恐ろしい計畫であつた。故にその事に觸れたる人は、どうしても健全に國家を維持するには、思想の方面に注意しなければならぬとの自覺を起した。けれどもそれは極めて少數の人であつたし、又その自覺を辿つて少しく計畫を進めたけれども、遺憾ながらそれも他の仕事の忙がしい爲に、やはり忘れられたやうなことになつて、大逆事件勃發以後、今日迄の間には、之に對する確乎たる施設は立つて居らなかつた。所が歐洲戰亂の結末として、戰爭の標榜するところが、利害得失の關係と云ふよりは、寧ろ思想の戦ひである、その内部に潜める實際はどうか知ら

ぬが、兎にも角にも聯合國は正義人道を標榜し、一方獨逸の側に於ては威力を頼みにして行く。この戦争は一方は力に依り、一方は正義に依ると云ひ、今日のところでは先づさう云ふ美名の下に、講和談判に移つて居るのである。さう云ふ間に各國には色々な事變が起つて、露西亞の革命が起り、又獨逸も休戦の結果國內に紛亂を起した。ア、云ふ帝國が一朝にして過激派の政府となり、或は又それに似たやうな意味の政府に依つて支配されると云ふに就ては、どうも是は容易ならぬことである、國家は外部から破られるよりも、寧ろ内部の民心の如何に依つて興廢すると云ふことが、最近の實例として鮮かに示された。此に於て乎如何なる魯鈍な者でも、どうしても國家は唯だ外部の形が整頓するばかりではいけない、國民の思想に基礎を置かない限りには、健全に國家は維持し發達することは出来ないとの自覺を起した。そこで今迄の愛國の精神が、この思想の問題に移つて來た次第である。即ち先きに或は法律制度を整へ、或は軍備の充實を圖り、或は教育の發達を圖りつゝあつた愛國的熱情を有する、經世憂國の士が、思想の問題に頭を振り向けることになつた。従來は文學者であるとか宗

教家などが、思想の重んずべきことを唱へて居つたけれども、是は社會的勢力とはならなかつた。コツ／＼學問して居る者には、どうも大した活動は出来ない。縦し考が淺かつたにもせよ、兎に角政治に參與し、或は軍事に就て一國の興廢を脊負つて立つ人は、その人格も力強いのであるから、それ等の人が、今迄形體の方面に於て國家に盡して居つた熱誠を以て、思想の側に向つて來ると云ふことになれば、こゝに始めてこの思想問題が大なる勢力を得て、明かにその善惡得失を決定するに至るであらう。尤も思想のことは、他の形體の問題のやうに、さう明白に優劣を判斷することは出来ないから、餘程困難でもあり、歲月をも要するけれども、今度起つたこの自覺、即ち「思想の如何に因つて國家が興廢する、是は油斷ならぬ」と考へたこの自覺は、恐らくは滅びないであらう。この自覺に基いて、是ならば先づ安心だと云ふ所まで、國民の思想を陶冶し終るには、將來幾十年を要するか分らぬけれども、この着想が國家を經綸する人の頭から除かれぬ限りには、何時か其處に到達する次第であらうと思ふ。

この自覺は今の世界の事情から起つたので、洵に結構であるが、我國に先覺者があ

つて、嘗てさう云ふ叫びをして居つたことが知れると、さう云ふ者がボンヤリ起つて來た人を導く上に、非常に力を副へるのであつて、俄に驚いて考へても、さう簡單に思想の事は解らぬであらう。日蓮聖人の遺文に示されたやうに、國家は思想に依つて興廢することが、色々述べられて居ると、それを辿つてその自覺が鮮明になつて來る次第である。故に日蓮聖人が思想を重んじ、さうして思索に非常な熱心を注がれて、愛國的熱情を思想の上に置かれたことが、吾々の學ぶべき要點であると考へるのであります。

三 思索の針路

さて思索を重んじた以上は、如何なる態度に依つて思索を進めて行くかと云ふ、この思索の針路に就て、日蓮聖人より學ぶべき大事があると思ふ。今日の思想界に現はれて居る問題は多方面であるけれども、大事な國民思想の問題に就ては、大體二潮流あることを發見するのである。それは昨晩も丁度歸一協會に於て、臨時教育調査會員

を招待して、相互の間に思想上の交換があつたが、その時にも自分は深く感じた。その二潮流と云ふのは、一つは日本在來の固有の文化を維持し、且つ發達せしめようと云ふことであり、他の一つは世界的思潮を受入れて、世界と分離しない文明、世界の文明と疏通したる文明を、一日も早く我國に開發せしめなければならぬ、範を世界に取つて、その思想を成るべく差支のない程度に我國に受入れよう——無論それは無批判で云ふのではないが、手本が向ふにあつて、向ふて善いと云ふものは善いのであらうから、それは善いとして我國に入れようと云ふのである。その批判の標準が明かならぬ、我國の國情なり、歴史なり、東洋の文明を基本として取捨決定するのはなくして、大體向ふに於て批判されて居るところの事だから、それは宜からうと云ふので、批判と云つても批判の標準が他に在る、世界的思潮を尺度とする態度である。一方は固有の文化を批判の標準に置いて、それに差支ない限りは西洋の文物を受入れるけれども、成るべくはさう云ふものよりは、固有の文明に依つてやつて行かうと云ふのである。この二つは、それだけの所を見たのでは、何れも善い著想のやうである。

世界的思潮と云ふことも無論重んじなければならぬことであるから、敢てさう云ふことを言ふ人が悪いとも思はぬけれども、併し段々に進んでその内容に這入つて行くこと、今の世界で認めて居る思潮は、デモクラシーと云ふやうなことを主要なる點に考へて居る。そのデモクラシーの解釋などは、各人多少違つて居るけれども、或は之を「民本」と譯し、或は「民主」と譯し、さうしてそれは國體には無論關係がない、政體以下の問題である、政體としても普通選舉を要求するのである。それから政策としては、多數人の利益を目的とする政治を行ふことである、又國民の側から見れば、多數の國民が自分の利害と相結んで國家を愛する所の精神を養ふのである。國家を唯だ國家として愛するにあらずして、自己の利害觀念を基礎にして、それが段々發達して行つて、遂に國家を大切にせなければ、自己の幸福も得られないと云ふので、元の出發點を個人思想に置いて、それから遂に愛國の觀念に導くのが、新らしい思想であると謂ふ。さう云ふ色々の事をデモクラシーの名に於て主張して居るのであるが、それは日蓮聖人の當時に既に現はれた問題であるのである。

事柄は少し違ふけれども、北條が民心を懐柔して、多數の民心さへ得て置けば、我が國體の上に於てそれが不義であらうと、大逆に當つて居らうと、朝廷に於て兵馬の權をお持ちなさらぬ限りには、是は恐るゝに足らない、併し多數の人民が蜂起して騒ぐ時には、それには多數の力を持つて居るから、それが爲に覆へされる。故に民心を懐柔して置きさへしたならば、宜いと云ふので、北條は割合に民政に注意をして、御承知の如くに租税を免じたり、社會救濟を行ふたり、時頼の如きは自ら草鞋を穿いて民情を調べて廻つたのである。故に後代の史家が之を見て、北條泰時、時頼などは、賢君であると論じて、政治家の手本の如く云つて居る。北條泰時は彼の「貞永式目」を拵へて居るし、法律上に於ても、政治上に於ても、民政の上に於ても、模範人物の如く稱揚されて居る。水戸の「大日本史」を見ても、泰時のことは悪く言つて居ないのである。

併し日蓮聖人はその當時に於て、之に對して如何なる批判を與へたかを見て、このデモクラシーの思想の勃興に對して、吾々日蓮主義者の取るべき態度が示されてある

と思ふ。それは今更申す迄もなく、日蓮聖人は多數の勢力に阿附することは、非常に嫌つて居るのであつて、この點から見ると今の新らしいと稱する世界的思想は、直ちに賛成し難いのである。若しア、云ふ思想が我國に勝を占めた時には、我が國體にも影響するが、同時に日蓮主義は興立しないと思ふ。聖人の遺文を見たならば、今のデモクラシー式の頭の人から云へば、「是は大變な事が書いてある、イヤ斯んな事は詰らぬ、斯んなものは邪魔になる」と考へるだらうと思ふ。それは日蓮主義者が聖人の教を愛する上から、慎重に考へなければならぬと思ふ。

四 思想の曖昧を警誡す

今の所ではデモクラシーを主張する人々も、色々其處に曖昧な態度を以て、燒直しの議論をして居るけれども、段々勢ひを得れば本音を現はすものであらうと思ふ。異なる思想が這入つて来るには、大なる相異を示して這入つては來ないと日蓮聖人が言つて居る、最初は少しばかり違つたやうな顔をして、ソロ／＼とやつて來て、遂に段

々地獄まで墮してしまふと、遺文の中に書いて居られるが、必ず邪説のやつて來るには、最初は少しづゝの所から這入つて來る。今日デモクラシーは全く我國の從來の皇室の爲された事とちつとも違はぬと解釋して居る。陛下が人民を愛し給ふた御精神、是れ即ちデモクラシーであると言つて居るが、併し元と／＼外國に發達したる思想を、さう云ふ他國の名前で我國に入れて來るのであるから、段々是が扶植せられると、元の香が付き、味が出て來るのであると思ふ。社會主義が傳道を始めた時にも、最初は極く穩健の所だけを言つて、何も危険なことは言はなかつた。それで西園寺内閣も、彼等の機關新聞の發行を許したのであるが、段々勢力を得て來て、遂には爆彈を執つて陛下に向ふと云ふような所まで行つたのである。所が丁度「今度の思想もさう云ふことはない、寧ろ我國に咀嚼して入れた方が宜い」と云つて居るが之を入れて行き居るその結果が何處まで走るかと云ふことは、是は思想問題と云つても、觀察に屬することであつて、言ひ譯はどつちでも出来る、「それは斯う云ふ意味なんです、其處が悪ければ其處を除つて斯うしますから」と云へば、それは先づ一寸豫審免訴位にはな

る譯であるけれども、併しさう言つて行き居る結果が、どうなるかと云ふことを、分明に觀察しなければならぬ。

それも日蓮聖人は教の方の事に就て申して居るが、爾前を法華と同じだと云ふ二圓同の問題に就ても、最初は法華經が悪いと言つては來ないのであつて、「此方の方にも法華經に似たやうなものがある、似ない所もあるけれども、その不十分な所を除き去ると其處に似たものがある。爾前の諸經には三角もあり四角もあり圓もある、圓いものばかりではない、三角と四角が混つて居るけれども、それを除つて圓い所ばかり持つて來れば、法華の圓い所に似て居るではないか」と言つて二圓同と云ふことを叡山の證眞と云ふ學者が唱へた。それを日蓮聖人が睨んで、大した悪い事のやうではない、法華經と同じものだから、味方が殖えるやうであるけれども、

日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と一と云ふ義の盛んなるより事起れり。

「十章鈔」に書いて居らるゝ。さうして前後の文章に於て、思想の選擇の注意すべきことを評論して居る。それはどう云ふ意味であるかと云ふと、

寒食の祭には赤きを忌む。

と言つて居る。「寒食の祭」と云ふのは寒行をすることであるが、寒行の時分には火は無論焚かぬけれども、其處には赤い色のものを持つて行くことをも禁ずる、火に似て居る色であるが故に、赤い風呂敷でも、赤い着物でも、物を食べる器でも、赤い朱塗の膳碗を出すやうなことはいけないと言つた。

義分當れりといふとも先づ名を忌むべし。

と喝破し、解釋すれば義理は差支がなくても、その名前が、大事なものを傷ける嫌ひがあつたならば、言ひ譯をして義理に差支がなくても、先づその名前を排斥せよと云はれた。是は何に就て言つたかと云ふと、即ち爾前の經をば、法華經に同じと解釋して、そこで南無阿彌陀佛と云ふことも、さう云ふ意味に於て云へば題目も同じ事だと言つて化けて出て來た、それがいかぬと言ふのである。南無阿彌陀佛を法華經の意味に於て唱へるなど、言つて、惠心の念佛と云ふものが出來た、惠心流の念佛は法華の念佛だと云ふやうなことを云ふ。さうして證眞流の者は、さう云ふ議論を段々擴張し

た。後年日蓮主義に大反對を表した真超と云ふ學者も、惠心流の念佛に閉ぢ籠つて、日蓮主義に對して色々駁撃を試みたのである。假令法華經の中から出た念佛だと言つてもそれはいかぬ、今南無阿彌阿佛と唱へたならば、それは法華の行者と誰が見るか、淨土宗が榮へて居る時であるから、法華の念佛であるなどと言つても、南無阿彌陀佛と唱へたならば、是は念佛の行者と世間の人が見るぢやないか。曾て釋尊は「常樂我淨」と云ふことは、内容を十分解釋したならば、差支のないことであるけれども、外道の常樂我淨と云ふことは、缺點が伴つて居つたが爲に、之を排斥した。「常樂我淨」と云ふ名は實在とか眞正なる幸福と云ふことで、宗教としては保存すべきことであるけれども、それでもその主張に弊が伴ふて居た故に、釋尊は之を打破つてかゝつた。即ち先づ名を排斥して「苦空無常無我」と云ふ正反對の方から行つて、婆羅門の思想を粉碎し終つて、最早そこにさう云ふ紛らはしいものが無い時に至つて、神聖なる法華涅槃の「常樂我淨」の教を打立てたのであるから、思想の紛らはしいものは、先づ名から排斥すべきである。筋がどうか斯うか誤魔化しが附くと云ふやうなことで、決して

許すことは出来ぬと教へられて居る。

五 日蓮主義と現時の思想界

そこで是は私の考が少し狹隘かも知れぬが、こゝに諸君の御批評も受けたいし、又この點は徹底的に日蓮主義者が研究すべき點であつて、且つ是は切迫して居る問題であると思ふ。日蓮主義者の中にも分裂を生じて、同一日蓮主義者であつてデモクラシイの宣傳者となつて出て來たり、或は又大いに反對する者として出て來たりして、この思想の爲に同一主義者が鬭ふやうなことがあつては、非常に不利なことであるから、私は自分の信念として、斯う云ふ「民本」とか「民主」とか云ふやうなことは——他の國で言ふて居るのが悪いとは決して言はぬけれども、日本の——殊に道德觀念の上には就ては、大いに警戒すべき所であると思ふ。若しも是が政策上のこととするならば、今の所謂社會政策は、多數民の幸福を意味して居るのであるから、疑義に亘る言葉を使はないでも、國家的社會政策を大いにやらなければならぬと云ふ主張を以て、十分

足りるものである。又普通選挙の問題であるならば、デモクラシーなど、言はなくても、選挙権の擴張と云へば宜しいので、又國民各自の利害と結んで國家思想を喚起せしめんとするならば、愛國心を十分に説明して、この内容を解釋して行けば宜いのである、それ等の事が殊更に一層今迄よりも必要になつたと云ふ言葉で宜い。國家的社會政策の必要、選挙権擴張の必要多數者の幸福増進と云へば宜からうと思ふ、何も疑義に亘るやうな言葉を以て、民心を動搖せしむる必要はない。

又茲に考へなければならぬのは、多數の民心と云ふものは、さう細かい所を噛み分けるものでない、それは日蓮聖人が始終言ふのであつて、「ナンマイダー」と言つて居れば、それは法華の主義から來て言ひ居るのだナンと云つても駄目だ、世人は直ちに念佛行者と見てしまふが如きものであつて、どうしてもデモクラシーと云ふやうな言葉を使ふと間違つて來る、その意味が、社會政策を意味するとか、或は國民的の愛國心を要求するとか云ふことならば、それを日本の言葉で言つたら宜からうと思ふ。色々疑ひの附き廻る外國の言葉を使ふには及ばぬ、それが誤解を起す原因である。故

に『先づ名を忌むべし』と言はれた點に於て、私は日蓮主義者としては、不明曖昧の言葉を使ふことに反對を言明して宜からうと信ずるのである。

さう云ふ點に於て、日蓮聖人は中々緻密な思想研究をやつて居る。それはその當時の佛教の思想と云ふものは、今の思想の分離より、モット緻密な點に這入つて居る。天台の末流の誤魔化しの議論でも、又各宗の者共でも中々狡るいのである。今日この西洋の思想を我國に入れようとして、丁度證眞見たやうな學者も出て來るであらう、弘法のやうな學者も出て來る譯であるから、中々一筋繩でいけない奴を押へつけて來たこの日蓮の言論を學んで、之に當ることが、我が國民に取つてよき參考になりはせぬかと思ふのであります。

實は今までの儒者風の頭、或は國學者風の頭では、この西洋の思想を適當に取捨することは出來ないと思ふ、彼等は單純であるから……日蓮主義はその點に於て、標榜する所は非常に鮮明であるけれども、中々その思想を選び分けて行く、又敵の思想を追窮し、粉碎して行く、許さぬと云ふやうな所には、非常に進んだ特長がある、中々

鋭い所がある、即ち折伏の主義を標榜したことに於て、我國の思想界に害を流すものに對して思想の闘ひを開くに就ては、確かに日蓮聖人は我等國民の先覺者であつて、さう云ふ呼吸、秘訣に於て大いに學ぶべき所がありはせぬかと思ふのである。斯う云ふことが斯うだと云ふ一々當嵌めのお話を申上げたいと思ふて居つたけれども、それを調べて居る時間が無かつたので、抽象的の議論のやうであるけれども、併し諸君は既に遺文に親んで居られるのであるから、是だけ申せば思ひ合せられることが多いあると信ずる。

六 日蓮主義と固有の文化

それから一方の、我國固有の文化を維持して之を大成發達せしむると云ふことは、是も無論結構なことであるが、併しそれが我國の現在に於て、どう云ふ風に考へられて居るか、固有の文化とは何を指して居るかと云ふことになる、大いに疑ひなき能はずである。私は昨晚教育調査會員も來られて居つて、さうして彼等の標榜する所は、

固有の文化を維持し大成發揮を期すと云ふが綱領で、その綱領から二つの内容を規定して居る、其處で私は「固有の文化と云ふはどう云ふ風に御覽になつて居るか」と尋ねたのである。我國の固有の文化と云へば明白なことではあるが、悲しい事には、今日の日本の政治なり又教育なり、社會の上流に立つ人々は、維新の當初に押寄せて來た思想、即ち一方は復古神道派——本居、平田等の唱へた極端なる、佛教を排斥し儒教をも排斥する非常に狹隘な思想を取つて居り。又一方には朱子學のやうな淺薄な考で、格物致知と云つて、丁度今の有形科學の方に走るやうな思想で、深遠なる方を忘れて來た傾があつた。理窟に合はぬことを一々當嵌めて、丁度今の實驗科學者が言ふやうな、形而下の思想に傾いて來たのである。さうして朱子學なるものも、やはり非常な排佛思想である、佛教のことを寂滅の教と言つて、幽靈でも出て來る如くに考へ、一も二もなく佛教の惡口を言つて居る。この二系統、即ち朱子學の思想なり、復古神道の思想なりを承け繼いだ者が、當時の武士階級であつて、それが今尙ほ勢力を占めて居るのである。露骨に言へば今の總裁の平田と云ふ人も米澤の藩士で、詰り鷹山公

あたりの系統を承けた人であるから、色々の思想はあらうけれども、彼の人の堅いところは何處かと云へば、やはり排佛派である。米澤は早くから敬神排佛を標榜したものである、鷹山公は、ゑらい人のやうであるけれども、思想の方から言つたならば、貧弱な人である。兎に角さう云ふ人が總裁であるし、又その外樞密院に居る所の元老の人達が、どう云ふ頭かと云へば、やはりこの貧弱な思想を承け繼いで居る。長州の學説と言つた所が、松陰先生は後には佛教のことを牢の中に這入つて少し知りかけたが、その意見を發表せずして死なれた。その書かれた物を読んで見ると、大いに悔悟されたことが明白になつて居るので、「牢の中で日蓮宗の坊さんと出會つて色々話を聞いたが、大抵の儒者より餘程議論が確かである。今迄は坊主なんと云ふ者は詰らぬと思ふて、自分も佛教の惡口を言つて居つたが、是は濟まなかつた」と言ふことを手紙に書いて居られる。それは近頃「松陰全集」が出来てさう云ふ手紙なども皆見るやうになつたけれども、長州で學問した人が、松陰先生の手紙を全體見て居る譯でもないから、大部分はやはり排佛論者であると思つて宜いのである。薩長土から出て來た日本の

維新の勢力は、皆悉く排佛論者である。唯だ直ちに廢佛を執行しても民心が騒いで面倒だから、マア敬遠主義を取れと言つて、何時とは無しに佛教の勢力を衰へさせて行かうと云ふ、漸滅主義を取つたものである。それは事實である。その頭は今尙ほ改善されては居まい、露骨に言へば、さう云ふ間違つた考を捨て、掛るのかどうかと云ふことを尋ねなければならぬので、固有の文化とはどう云ふ事を云はれるのか。復古神道の頭なり、朱子學から來たものを、日本の固有の文化と見られては困る。今迄それを試みて歐米の文化と接觸を取る時に、此方の頭が貧弱であるから、咀嚼し切れなくて今日の弊に陥つたのぢやないか、それを又此處でモウ一遍繰返すとも、同じ事を繰返すのみである。さう云ふ頭に立戻つても、やはり向ふの思想の爲にはやられるであらうと云ふやうな事を、昨夜申したのであるが、私はそれが一つの信念である。是は日本人の大いに自覺せんならぬ事柄で、何も元老を攻撃すると云ふやうな小さな考ではない、大日本帝國の前途の爲に、言はずんばあるべからずと信じて居る。

我國の固有の文化と云へば、少なくとも聖德太子あたりから大發達を遂げて來た神、

儒、佛三教の精髓を調和的に認むるが、是が日本の眞の固有の文化と云ふもので、復古神道とか、朱子學と云ふやうなものは、一の學派である。日本の文明の正統全體ではない、日本の文明中の一學説、一家言である。維新の當初に押寄せて來た復古神道と云ふやうな、儒教を排斥したり、佛敎を排斥したり、復古と云へば唯だ神ながらの元もとに戻つて古事記、日本書紀、にあることばかりが神聖である、その他の事は皆固有でないもとと云ふやうな、折角今日まで發達したる我國の文明を否定するやうなことは、實に詰らぬ考へである、學派の中に於ても價值なき學派、誤れる學派である。又朱子學と云ふものも、儒敎の中の學派中の一つで最も固陋なものである、最初の朱子はそれ程でもないけれども、段々弊に弊を生んで、殆んど價值なきものになつて居つたのである。その固陋なる朱子學と、價值なき復古神道とを以て、固有の文化と見ると云ふことになつたならば、今日の如き失態は其處から來るのであるから、そんな事を又繰返した所が、今後益々その反動として、思想界動亂の弊が起つて來て、一層國民の精神は攪亂されるであらう。

その復古と云ふ中には、建國の事實、理想を尊重する、國體を尊重すると云ふことで現はれて來る、そこは非常に良いけれども、それが大いに吟味せんければならぬ所である。國體なり建國の事實と云ふことは良いけれども、復古神道流の頭では、古事記、日本書記に限ると思ふて居る。この日本の國體なり、建國の事實、理想を擁護し奉るものは、聖賢の敎なり、佛敎なりが、共に千數百年間働いて來たのであつて、是が血となり肉となつて居るので、それを我國固有の文化と見なければならぬ。然るに國體擁護と言へば唯だ復古神道流の頭で、佛敎は夷狄の敎だと云ひ、宗教の必要を文部省が自覺しても、生徒を氏神に伴ふてお参りさせるだけで、先祖を大切にすることに於て、お寺に詣れと云ふことは決して言はない、日本ではお墓に詣ることが無い限りには、先祖を大切にすることは行はれないのである。唯だ敬神崇祖は、氏神のドンドコ祭の時に生徒を伴れて行つて、玉串を捧げることだけしか學校でやらない。斯う云ふやうに、宗教が必要だと云へば神道、固有の文明と云へば古事記に戻らんとする傾向がある。さうすると斯の如き固陋貧弱なる思想を以て、世界的思潮を受入れようとし

て、新らしき潮流に向ふならば、國民の思想は確かに二分されるであらう。どうしても學者の間に議論が起り、政治家の中にも議論が起つて、青年學生とか一般の國民は、適從する處を知らなくなる。國民思想はこの二潮流に於て大いに攪亂せられると見なければならぬ。

七 我國文化の體系的發揮

然らば茲に大いに國民に告ぐる所が無ければならぬ。日蓮聖人は、固有の文明と云ふことを解釋するには、全く三教調和の系統に屬する人である。日本の思想家には、單に神道をやつて儒佛二教を敵とする者がある、儒教をやつて神佛二教を敵とする者があり、又佛教に没頭して神儒二教を輕んずる者もある。或は二つを取つて一つを敵とする者がある。又三つを調和する者でも、頭の置き方が各々に違ふ、そこを精密に研究することが、固有の文明を見るに就て大事な點である。然るにこの三者の關係を見ないで、復古神道の一つに頭を突込んで、それが大事ぢやと云ふやうなことを考へ

て、初めから佛教などは顧みないで、將來日本の國民思想を指導しやうとするは、實に僭越極まることである。それは一々説明する迄もないのであるけれども、神道だけに依つて儒佛を敵とする者は、復古神道なり又伊勢の度會延佳が開いた唯一神道の如きは、一も二もなく佛教の惡口を云ふ、それから復古神道の方は平田篤胤のやうに、佛教を糞味噲のやうに云ふ、お經の中には色々なことがあるけれども、その中の悪いやうな事を引張り出して來て、例へばお釋迦様が男根を出して女に見せたと云ふやうな事を擧げて居る、故に佛教を知らぬ人から見たならば、如何にも佛教は下らぬものだとの感じが骨身に染みた譯である。實に惡辣な手段を取つたものである。佛教の有する偉大なる道德、哲學、宗教、其他の人生訓の一つも之を尊敬しないのである。然るにこの偏狹にして且つ惡辣なる意見に酔つて居る者が、今後の日本の思想界を指導しようとするも、逆も行くものぢやない。

又一方には儒教に倣するが爲に、神佛二教を忘れた者がある。是は聖堂を初めて開いた林大學頭、朱子學の開山は、神道をも敵とし佛教をも敵とする、非常な支那かぶ

れの男である。現に彼等は、日本の先祖は周の太伯と云ふ者が渡つて來たものと云ひ、周は日本の御本家である、日本は分家であると言つて居る。東海の姬氏國と云つて、姫は周の裔である、周の分家であると言つて、儒に倣して神佛二教を咀つたのである。それが段々勢力を得て來たが、天海僧正あたりが一方に勢力があつたものであるから、林大學頭がそんな事を言つて居るのを殿中で捉まへて「再び貴様さう云ふ事を言つたならばその分には置かぬぞ」と小言を云つた、そこで「是から心得ます」と云ふやうな事になつた。

元來天海がどうして江戸にやつて來て、徳川に勢力を得たかと云ふと、彼れの一世一代の事は、彼が自ら言ふ所に依ると、唯一神道が起つて、江戸にもそれを主張する古川惟足と云ふ學者が現はれた、それが非常に勢力を得て、京都に行つて朝廷の方に這入り込んで、排佛論を實行しようとした。その時天海は京都に居つて「左様な事をなさつては宜しくない、聖徳太子以來、日本は神儒佛主義を融合して來て居る。殊に朝廷は佛教を興隆された大擅越として、國民の多数は佛教を信じて居つて、朝廷を徳

として居る、左様な事をして佛教を廢止されたならば大變な事である」と云つて、段々利害得失を説いたので、京都の朝廷は天海の議論を容れられることになつた。處が又その學者が江戸の方に来て、徳川に這入り込んでこの唯一神道を實行しようとか、つた、唯一神道を實行すると云ふのは、即ち佛教のお寺を壊してしまふことである。それからは大變だと云ふので天海が江戸にやつて來て、大いに論じてそれを粉碎してしまつた。その時家康が兩方の議論を聽いて、是は天海の言ふ方が確かである、えらい坊主だと云ふので初めて天海が家康に認められて、徳川政府の顧問となつた。彼は色々立派なことをやつて居るが、この唯一神道の勃興を抑へて、我國の文明をして神儒佛の融合を維持せしめたのは、天海が我國文明に對する偉大なる功績である、彼れ自ら一世一代の偉業は此の一事に在りと言つて居る。さう云ふ工合で儒者は佛教と共に神道を敵として、最初山崎闇齋が垂加神道を起す時に、彼れの友人が非常に罵倒して「儒者ともある者が神様を拜むと云ふことがあるか、怪力亂神を語らずぢやないか」と言つた。その當時の儒者は、日本の神様を拜むのでも「怪力亂神」と思つて、

神などはないと云ふ思想を鼓吹したのである。

一方又佛教の方に於ては、佛教さへあつたら何も要らぬと云ふ者がある、淨土宗などがそれである。阿彌陀様を信じたならば、伊勢にお参りすることも要らない、儒教などはてんで眼中に置かない、人間の善惡などは意に介するに足らないと言ひ、一向専念を立て、神道を排し、儒教を排したのである。單に佛教を信じて——而かも佛教の中の一つの固陋なる思想に陥つたのである。

けれども斯の如き者は、何れも我が固有の文明の一支派一家言であつて、少なくとも日本の文教の府に立つ者であるとか、日本の國民思想を指導せんとする者は、斯の如く單に神道に捉はれて儒佛を敵とし、或は佛教に倣して神儒を敵とし、儒教の上から神佛を忘れるやうなことがあつてはならぬ。三教各々の長所を融合して、我國に活用された健全なる意味を以て、固有の文明としなければならぬ、そこが非常に大事な點である。

八 日蓮聖人の濶達なる學風

所が日蓮聖人はさう云ふ一つに偏らぬ方であるから、日蓮聖人の傳を見ても能く分つて居るが、聖人は神道の方の事は吉田家に受けた。あの當時の神道と云ふものは、吉田家一流しかない、色々の神道の學派はそれから後に出來たので、吉田家と云ふは神道の系統の最も正しいものであつて、神道の相傳や秘傳が皆傳はつて居つた。聖人はその相傳を承け、又吉田と云ふ人も日蓮聖人の教義を聞いて、佛教を信ぜられたのであつて、日蓮は坊さんでありながら、神道の傳を承けて敬神の觀念を養ひ、又吉田は日蓮聖人の教化を受けて、佛教を奉ずることになつた。それであの時の日本の神様は、佛法はお好きだと云ふ風になつて、兎に角思想を融合する爲には、お好きであると言ふ方が非常に宜いと思ふ。佛教の方は如何なる善い經卷を持つて來ても、それと神様の御威徳を増すやうにと言つて、法華經でも仁王經でも、神様に捧げて行く。思想の融合に就ては、如何なる宗教が來ても道德が來ても、皆その絶對のものを日本の

神様に捧げると云ふ態度は、之を歓迎すべきである。然るに唯一神道の馬鹿な頭があつて、さう云ふものはいかぬ、追拂つてしまへと云ふ、日蓮聖人は三教融合の思想であるから、さう云ふ風に神道を學び、又儒教の方は大學三郎に學んだ。大學三郎は又日蓮聖人の弟子になつて、今の鎌倉の妙本寺は、即ち大學三郎の住んで居つた邸宅である。聖人は又佛教徒でありながらその門人になられて、安國論を書かれた時には、文章を見せて多少は直ほして貰つたと云ふことである。又遺文の全體に亘つて、儒教の聖賢を尊敬して居ることは、實に儒者が己の先輩を尊敬する以上に、聖人は儒教の中に現はれて居る偉人を崇拜して居る。儒教の忠孝の道德、仁義の中の殊に義に重きを置く道德——儒教の眞髓は日蓮主義に於ては最も之を尊敬して居る。我國の固有の文明はどうしても三教融合でなければならぬ、而して聖人は固陋な學派でなくして、大いに革新の思想を持つて居たから、他に對して有らゆる思想を攝取融合することを、少しも厭はないのである。元來その當時から言へば、儒教と言ひ佛教と言ふものは、外國思想であるけれども、日本に來つて我が文明を助くる以上は、皆共に之を採つて

活用しやうと言ふ考であるから、彼の當時に於ては、神儒佛三教は世界的全體の文明である。その他色々のことはあつても、皆其處に現はれたる文明の全體を包容し、さうして日本の中心の思想を維持して、國體は國體として根本の處に置き、それと觸れないやうに佛教をも解釋し、儒教をも解釋し、渾然として統一する大理想の下に、廣く世界的思潮を學ばれたのである。今日に於ても日蓮主義を實地に運用すると言へば、歐米の思潮と雖も決して拒絶すべきものでなくして、寧ろ之を迎へ入れて、開顯し統一する態度に出づべきは論を俟たぬことである。

九 異邦文明の洗練

併ながら之を受入れるに就ては、充分に吟味をしなければならぬから、

彼の國によりかりし法なればとて、此の國にもよかるべしとは思ふべからず。

と示されて居る。この文に廣く世界の文化を咀嚼して、我國の文明を大成しやうとする考があることが分かるのである。

一〇 文明取捨の標準

尙ほモウ一ツ、この思想の標準と云ふか、中心と云ふか、思想の順逆を顛倒せぬやうにする觀念である。同じ善いものであるからと云つても、唯だダラ／＼どれても宜いと云ふことは駄目なんて、其處が又日蓮聖人の非常に喧ましく論じて居る所である。西洋の思想と我國の思想とを調和して、共に其長を採つて、世界的文明を創建しようとする運動に移るならば、唯だ何處でも善いものがあつたら取ると云ふやうなことは、やはり本當の融合は出來ないのである。この融合にはどうしても自主的精神がなければならぬ。

日は東より出て、西を照す。

と日蓮聖人が言つた。世界の思想は受入れるけれども、此方が客になつて向ふを主人にして、思想の上に於て奴隸となることは決して許さないので、思想の上に於て主人となること、日蓮聖人の嚴密に考へた態度である。それであるから随つて日本の國を、

月氏漢土にもすぐれ、八萬の國にも超へたる國ぞかし。

と云ふのである。彼の當時で言へば月氏と云ふは今の所謂亞米利加、英吉利である。即ちあの當時に於て、佛教を奉ずる者から言ふたならば、日本は邊土である、日本は粟散國である。天竺と云ふは偉大なる國で、文明の盛んなる處である、釋尊の出た國であると言つて居つたのであるから、丁度今日歐米の文物に酔うて歐米を崇拜して居るやうな考が、その時も流れて居つた。然るにも拘らず、聖人は、印度は月氏國である、月の國である、我國は日の本である、日の國である。世界の文明は日本より大成する。

佛法必ず東土の日本より出づべきなり。

と言つて居る、この自主的精神を失つてはならぬ。是は何も慢心ではない、それだけの立派なものが我國にあると云ふことを、日蓮聖人は認めて居るのである。それは國體の方に於て、日本が萬國に冠絶して居ることを信じ、思想の方に於ては法華經の教

が有らゆる思想を開顯統一するに、最高標準なることを信じて居つた。この理想的なる國體を持つて居る偉大なる國家と、この理想的なる思想の基準を示せる法華經とを結合せしめたならば、鬼に金棒である、天下敵なきものであると云ふ信念を以て立つたのである。其處でこの二つが若し倒れるならば、その時は日蓮主義は滅亡してしまふのである。この法と國とを失つても尙ほ日蓮主義が存續すると思つたならば、それは非常な間違であつて、この二つを生命として起つたのであるから、若し我國の國體が破れ、法華經の精神が破れたならば、その時は日蓮主義は美事に切腹してしまへば宜い譯である。命懸けて守護せんならぬのは、この二點である、日本の興廢存亡が、我が日蓮主義の興廢存亡である、國は亡びても尙ほ且つ日蓮主義が存するとは思はぬと聖人は言つて居る。さう云ふと非常に卑劣な宗教の如く考へる人があるか知らぬけれども、その代り日蓮聖人の理想する所の日本は、決して普通人が考へるやうな低劣な國家ではなくして、思想の上に於て、道德の上に於て、文明の上に於て、世界の模範たるべき國家である、下手な宗教とか倫理よりは、立派な内容を持つて居る國家とし

て、日蓮は之を見て居る、この日本の理想的なる國家の中に、さう云ふ偉大なる思想文明があるのである。何も比叡山を捨へようとか、本能寺を捨へようとか云ふのではない、本門の戒壇の建設と云ふも、陛下が親臨せられて陛下が國家の上に於てお建てになるのである、勅宣を下されぬ限りに於ては建てないのであるから、今迄の宗旨宗派のやうに、勝手に大きな寺を建て、威張つたやうな事は聖人はせないのである。法華經を以て文明を助けて行かうと云ふ考であるから、日本の國が滅びれば日蓮主義も亡びると云ふことは、日本の國家が滅びれば日本の文明も滅び、日本の文明が滅びれば東洋の文明も虐待せられ、終に滅びてしまふと云ふのと同じ事である。何も可笑しいことはない。國が滅びても尙ほ且つ宗教が存すると云ふやうなことを考へて居るのは、非常な間違であらう。それは萬一左様なことがあれば、スツカリ變形してしまつて、全然意味の變つたものになつて存續して行くのである。それは日本が亡びても法華經は文學となり、或る意味の宗教となつて残るか知らぬけれども、日蓮聖人の解釋したる意味に於ける法華經は滅びてしまふのである、又滅びて宜いのである。

その場合には、是が滅びるとか滅びぬとか言つて、一つの宗旨を愛護して、國家よりも大切だと思ふやうな思想は、全く一つの誤れる觀念であると思ふ。

一一 精神的文明の自主的信念

思想を取捨する態度は、自主的精神に立たなければならぬ、併し唯だ自主的と言つても、其處に十分の内容がなければ、慢心のやうになつてしまふと思ふ。忠孝の道徳を説くにしても、それは結論としては結構であるけれども、その内容を説明することが、唯だ「日本の歴史でさう仕來つて居つたのである、兎に角一番善いのであるから」と云ふやうな、説明の出來ないことを以て濟まさうとしても、今は批評的研究が盛んであるから、さう云ふ意義を解釋しないやうなことは、段々勢力を失つて行くであらう。所が日蓮主義なる者は、忠孝の道徳に對しても、日本の國體を説くに於ても、東洋の文明を鼓吹するに就ても、總べて内容を明かにして、斯の如き意義に於て尊いと云ふことを、極力説明するのであつて、この點に於ては、日本の國民道徳を維持する

場合にも、日蓮主義の論式を用ふる必要がある。是は日蓮聖人の思想研究が根柢に入り、内容を説明する點に於て、現今の手本となるべきものであると思ふ。日蓮主義を學ぶと堂々たる自主的精神が起つて來る。他の言葉を以て言へば、西洋の哲學なり、西洋の倫理なり、西洋の宗教なり、西洋の文明に對するには、佛教の豊富なる哲學、道徳、宗教、理想を有し、又神儒佛三教を融合したる思想を以て向ふべきである。復古神道や朱子學の如き貧弱なる思想を以て、西洋の文明を咀嚼しようとしても、到底それは不可能である。

一二 理想的の國家觀念

尙ほその他思想問題に就ては、大事なことが多々あると思ふ、その思想の解決方針に就て一つ二つ申上げれば、國家觀念に就てもやはり内容を明かにしなければならぬのである。今の世界的大問題と云ふは、その國々の理想が、帝國主義であるか人道主義であるかと云ふことで闘つて居るのであるが、是も西洋人の闘ひは偏傾して居ると

思ふ。例へば獨逸は單に威力を崇拜した、聯合國は單に正義を崇拜したと云ふけれども、それは各々の半面からさう見るのであつて、要するに今度の聯合國の讃むべき點は、その内部に蟠つて居ることはどうか知らんが、先づ表面から見て、正義を標榜して、正義を擁護する威力を惜まず、英吉利も佛蘭西も亞米利加も、皆多大な犠牲を拂つて、さうして狂暴なる獨逸を粉碎したと云ふ、その正義に威力が伴ふて居た點が尊いと謂はなければならぬ。唯だ正義が尊いのではない、若し亞米利加が正義の議論ばかり吐いて居つて、軍隊を送らなかつたならば、何も尊いことはない、やはり亞米利加は正義と威力を以て活動したが爲に尊いと謂はなければならぬ。所が今日議論をする者は、「獨逸は威力である、亞米利加は正義である」と言つて、正義と威力を二分して考へ、亞米利加を謳歌する者は、直ちに軍備の充實を不必要の如くに言ふ。今後は軍備などはどうでも宜いと云ふやうに考へて、軍備の必要を説く者は時代に後れたやうに論じて居る人もある。

それから又一方は「ナニそんな馬鹿な事を言つたつて駄目だ、人道正義を説いたからと言つて中々戦争は止むものでない」と云つて、その人は無暗に人道正義を罵倒して、單に武力本位の思想を鼓吹するのであるが、是はどちらも甚だ偏傾した考である。

今の日本の思想の戦ひにも、この二偏見が大事な問題になつて現はれて來て居るのであるが、この點も日蓮聖人から學べば宜いと思ふ。多くの宗教家は今の正義論者のやうに、威力を輕視する。又多くの國家主義者は今の獨逸のやつたやうに、唯だ武力本位の頭で來た人もある。所が日蓮聖人に於ては、この正義の主張は無論であつて、元來が宗教家であるから、正義の觀念は内に向つては北條の失政を攻撃し、外は蒙古の襲來に對して日本の執るべき態度を明かにして、蒙古の使を斬つた事も、日蓮聖人は攻撃して、「蒙古の使を斬ることはない」と言つて居る。「使は役目で來た者であるから、返事をして歸したら宜い、臆病風が伴ふが故に、罪なき使の首を斬るのである」と言つて居る位である。あの時代に敵國の使を斬つたことに反對する位であるから、國際道徳に就て、若し今日日蓮聖人が居つたならば、非常な進歩した思想を示すこと

は明かである。正義はその通り内に向つては北條の暴逆に反抗し、外には蒙古の威力がやつて來ても、

小蒙古大日本國に押寄す。

と唱へて、正義の勝利を信じて居たのである。併し日蓮聖人は一面に於て、如何に正義を標榜しても、やはり國家は威力を忘るべきでない、宗教に於ては正義と折伏とが伴はなければならぬ、何處までも正義と威力の結合を考へて、國に於ては飽迄も軍備を忘れないやうにせよと謂ふのであるが、その思想は元來が轉輪聖王の思想から現はれて來たのである。轉輪聖王は徳を以て治むると同時に、一方如何なる暴逆なる者でも粉碎する所の絶對の威力を持つて居る。轉輪聖王は絶對の正義を行ひ、絶對の威力を持つて居る。故に日蓮聖人の日本國に就ての理想は、世界の正義の標準となり、而して世界から、壓迫せられないだけの威力を有つて行かなければならぬと云ふのである。然らば今の正義論であるとか、威力論であるとか云ふやうに、一方に偏しないのである。

正義と威力を併行して、他の侮りを受けないやうに、先づ國家を土臺として世界の文明に貢献せねばならぬ。

この外色々時代に横たはつて居る問題もあらうけれども、自分は思想問題に就ては、日蓮聖人の遺訓の中から、その標準を尋ねて判断すれば、大體誤らぬ針路が得らるゝと信ずる。

第八篇 一乘主義

一 一乘主義の典據

順序と致しまして、一乘主義の典據を列擧したいと思ひます。

先づ法華經に「一佛乘ニ於テ分別シテ三ト説ク」といふ有名な經文があります。此文は、一乘主義の典據として、第一に擧ぐべき事と信じます。併しながら、是は三乘を開顯するといふのでありますから、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三乘を開顯して、一佛乘を現はすといふのであれば、佛法内部の統一といふことになるのである。併し此前後の經文より見ますれば、此文は五乘開會といひまして、世間と佛法、及び佛法内部の關係を統一することになつて居ります。

又彼の有名なる「若シ俗間ノ經書、世ヲ治ムルノ語言、生ヲ資クルノ業等ヲ説カンモ皆正法ニ順ゼム」といふ文は、正法といふが統一點でありまして、其統一せらるゝ

ものは、俗間の經書即ち道德、世を治むるの言葉即ち政治法律、生を資くるの業等即ち殖産興業、其他生活全部を指して居るのであります。此意味に於ける一乘主義は、廣く世間の文明を歸一し來たる大思想を表白して居るのであります。

又大體法華經といふは、簡單に謂つた言葉であります。詳しく謂ふ場合には「平等大慧教菩薩法佛所護念ノ妙法華經」といふことが、法華經の中に現れて居る。此中の平等大慧といひ、又菩薩を教ふるの法といふことは、是は一乘の思想でありまして、此平等といふことが、法平等、衆生平等と申しまして、宇宙觀の歸着と、それから人身觀の歸着とを指して居るのであります。教菩薩法といふ言葉の場合には、いかなる人でも、悉く菩薩行に入らしむるといふのであつて、菩薩行なるものは、一乘の行であるから、教菩薩法といふ言葉が、非常に廣い一乘主義を言ひ現して居るのであります。

それから又「無量ノ菩薩ヲ教ヘテ畢竟シテ一乘ニ住セシム」といふ句は、上行が出現して働く目的を言ひ現して居る言葉で、此處にも法華經の一乘主義なることが明白

てあります。従つて法華行者を一乗の行者と稱へ來つたことは天下周知の事實であります。

其他の經文に就て、一乗の典據を擧ぐれば、先づ勝鬘經に一乗章といふのが、(大藏經要義卷一の三二二頁参照)そこに「勝鬘佛ニ言サク、世尊ヨ、攝受正法トハ是レ摩訶衍ナリ、何ヲ以テノ故ニ、摩訶衍トハ一切聲聞緣覺世間出世間ノ善法ヲ出生ス、世尊ヨ、阿耨大池ノ八大河ヲ出スガ如シ」といふ文があります。是は一乗章の劈頭に擧つて居る經文であります。此中に、摩訶衍といふことを言つてゐるのは、是は梵語で、譯すれば大乘とも一乗とも謂ふのであります。で、其大乘若くは一乗といふ義理は、小乗の法も、又世間の法も、一切を包括することが、恰も阿耨大池の如きものである。阿耨大池といふのは、雪山の頂きにあるところの大きな池で、其池から流れて八つの河を出して居る。そうして其八大河といふのは、つまり世間の經濟とか、政治とか、道德、或は佛法内部の小乗とかいふものをそれに譬へて、其等の、世間及び佛法内部を、總べて、そこに統一點を示すのが摩訶衍であり、取りも直さず一乗主義で

あるといふことを書いて居るのであります。

其續きの文に「聲聞緣覺乘ハ皆大乘ニ入ル、大乘トハ即是レ佛乘ナリ、此故ニ三乗ハ即是レ一乗ナリ、一乗ヲ得レバ菩薩ヲ得ム」と説いてありますが、此場合には大乘といふこと、佛敎又は一乗といふことは一つであるを示し、さうして、三乗の敎も悉く一乗に歸する、若しも一乗の敎に頼らなければ眞の菩提が得られないといふことを示して居るのであります。

それから仁王經であります。この經に二諦品と稱するのがあります。二諦とは世間と佛法でありまして、此處では世俗諦と勝義諦といふことになつて居ります。(大藏經要義卷一の二七六頁参照)此標題からして、勝鬘經と仁王經とはどちらも一乗を説くに適切なる題號である。一方は一乗章、一方は二諦品であるから……。此二諦品の方には、波斯匿王が佛に對して「勝義諦ノ中ニ世俗諦アリヤ否ヤ」といふことを尋ねました。勝義諦とは此場合には一乗の意味に現れて來るのであります。其中に世間の道德政治其他今日の所謂文明の諸要素が在るのであるか、無いのであるかと、斯う

いふ事を尋ねた。それに答ふるに、世間と佛法は決して混同すべきものではない、各々本領がある、併しながら、人間の心を加ふれば此二つを融合し得る、混合して客観に一つにしてしまつてはならぬ、常に思想の了解を加へて其融合を見に行くが大切であり、之を客観に置けば政治宗教皆分域があり、世間と佛法とは、是は無論二つのものであるが、各人の了解を加へて二者の調節融合を計ることが大切なので、故に客観に於ては二、主観の了解を加へては一といふところの關係を達観し、今日の言葉で謂ふならば、分域を明かにすると同時に、調和點を見て行くことが、真正なる意味の佛法である、即ちそれが勝義諦である、佛法を佛法として、飽くまでも世間と分離するとか、若くは世間と混合してしまふとかいふことは真正なる佛法でないといふことを説いて居る。此場合には、世間と佛法との融合に就て、一乗の意味を表して居るのであります。

次に、涅槃經に於て之を觀ますれば、梵行品に於て（大藏經要義卷三の三六四頁參照）「義無礙トハ、乘三アリト雖モ其一ニ歸スルヲ知ツテ終ニ差別ノ相アルヲ言ハズ」

といふことがある。是は畢竟佛法全體の統一を了解することが義無礙といふことで、此佛法の義を滞りなく了解するといふことは、一乗の意味に於て見なければならぬ。若し佛法の一乘主義を了解しないならば、それは滞つて通ぜざるところの思想である。即ち佛教に於ける誤解であるといふことを宣言して居るところの言葉であります。又同じく涅槃經（同上二七頁參照）に、徳王品といふのがあります。此處に有にあらざる無にあらざるといふ意味合をよく説明して居ります。この有にあらざる無にあらざるといふことは即ち中道でありますが、この中道は即ち一乗なのであります。有といひ無といふことは、是は何にても附くのである。一つの問題に就て、つまり肯定否定といふ風に見て行きますれば、此偏傾せるところの思想の、即ち、佛法に拘泥して世間を忘れるとか、世間に拘泥して佛法を忘れるとか、或は小乘に拘泥して大乘を忘れるとか、大乘も孤立的に見て他の佛教との疏通を計らぬとかいふやうなことは、皆この有無の二偏見と見れば、涅槃經に使うて居るところの有にあらざる無にあらざるといふ言葉は、中道實相、即ち眞の一乘主義を言明して居る言葉であります。天台が「一色一

香中道ニアラザルナシ」と言つたのを見ても、中道といふ言葉が、唯々物の真中といふ位の意味でなくして、完全なる理想を言ひ現す言葉になるのであります。此意味に於て、涅槃經の中道實相の思想は、一乘主義を説くこと至れりて、内には小乘を開顯して大乘との疏通を計り、外には世間を開顯して佛法との疏通を計る、それは涅槃經に到る處の經文全體がこの思想を示して居るのであります。

それから又大集經によつて之を證明致しますれば、大集經は大乘即ち方等部であります。普通の一乘といふことを説くに於て至れりてあります。いくらも證據はありますが、其二三を挙げますれば、先づ陀羅尼王品(大藏經要義卷二の五二頁参照)であります。「能ク諸佛ノ法ヲ知り、世出世ノ行ヲ行ジ、無上智ヲ修集シ、之ヲ説クモ一乘ニ歸ス」といふことがある。是は、佛法といふものは單に出世の行だけでないものである、眞の諸佛の法を知るといふ場合には、世間の行ふべき事、佛法の行ふべき事を知つて、其兩方を整へて行ふのである、世出世の行を行するのである、又佛法の無上智といふものは、三乘を説いても常に一乘に歸着する、即ち開三顯一の思想がなくて

は、眞の無上智といふことは云へないと説いて居るのである。併し大集經あたりに於て、さう云ふ思想が從來鮮明に紹介されなかつたのは、やはり是は時代精神であつて、法華經の眼から一切經を見るといふことになれば、大集經あたりは寧ろ法華經の助となるべきもので、開顯に向つて居るものである。

又寶女品(同上七三頁参照)の所に「一切ノ諸乘ハ大乘ヲ最トナス」とある。佛教には人を救ふが爲に色々の教が乗物としてありますから、様々の教が説いてあるけれども、大乘一乘といふことが是が最上の教である、佛法を學んで大乘一乘の域に至らんければ眞の佛法を知るものでないといふことを、此に詳細に説明して居るのであります。

尙ほ同じく寶女品(同上七六頁参照)に、寶女が大乘の義理を尋ねて居る所がある。「何が故ニ大乘ト名クルヤ」と尋ねた時に、佛が答へには色々の意味がある、大と名づくるに就ての尊いことをズツと説いて、終りに、方便波羅蜜を具足しなければならぬと言つてある。方便波羅蜜といふのは、世間との繋りを取り、他の教との繋りを取り、

殺活自在の妙を得て、一切の教を攝取する、攝取一切諸乗と名づけて居る、大乘とは畢竟一切の教を統一して來なければ、對立的のものである、分立的のものである、大とは云へない、一切諸乗を攝取するに於て初めて大乘であるといふことを佛が答釋されて居る。

それから海慧品(同上九三頁參照)に於ては「佛法トハ一切法ト名ク」とある、佛法と云ふから何か部分的のものやうに思ふけれども、佛法といふ言葉は一切法といふ言葉である、總てを包括するといふことが佛法である、其一切法を包括するといふ意味が又是れ大乘である、この「佛法トハ一切法ト名ク、一切法トハ名ケテ佛法トナス」と云つた言葉が即ち一乗主義である。それから、さういふ風に一切の事を佛法に融合する意味合に於て例を舉げて、其少し前の所であります。「耆婆醫王ノ如キ常ニ此言ヲ爲ス、天下ノ諸有是レ藥ニアラザルナシト、菩薩モ亦爾ナリ、一切ノ法ヲ説カシニ菩提ニアラザルナシ」と云つてある。丁度名醫が有りとしあらゆる物皆藥であるといふ如くに、菩薩の智慧が開ければ一切皆菩提を助くるものにあらざるはないと説いて居るのであります。

それから又、同じ所に大乘の百法(同上九七頁參照)といふことを説きまして、さうして其廣大なる大乘を修めたる時には何を取るか、或は菩提心を取るとか、或は不放逸を取るとか、或は慈悲心を取るとか、色々の中心になるべき思想を挙げまして、一方に大乘を攝取することを説きましたが、之を半面から見ますと、斯の如き尊い、總ての文明の根柢となるやうなものを百種包括して、それを一大乗即ち一乗と稱して居ることが分るのであります。

尙ほ一乗といひ大乘といふやうな言葉が、從來阿含小乗と稱せられて居る中にやはり存して居つたのである。佛法は、阿含の初より涅槃の終まで一乗であるといふことを立證する爲に、阿含の經文を一つ紹介致します。

中阿含經(大藏經要義卷五の三〇頁參照)といふ御經があります。是は釋迦最初の説法でありまして、それに「此二邊ヲ離ルレバ則チ中道アリ」といふことがある。此場合の二邊といふのは、世間と婆羅門とを指して居ります。併しながら、世間と婆羅

門を排斥はしないので、其偏見を矯正して、世間を善導し、婆羅門を啓發致しましたのが阿含の教化であります。故に釋迦が以上二偏の謬を責めてさうして中道を説くといふことは、往いてそれが一乗であり、やはり大乘の義を構成するのであります。従つて雜阿含經（大藏經要義卷五の九七頁參照）には「一乗ノ道ヲ説イテ諸ノ衆生ヲ淨メ乃至眞如法ヲ得セシム」といふことがあります。故に雜阿含と雖も、一乗の道といひ、眞如法といふことを云つて居るのであつて、是等を大乘の專有物の如く考へて居るのは間違つて居つります。殊に雜阿含といふのは、後世に手を入れないものとして、其記述も粗雑であり、うぶに出來て居るので、批判家の間には、是が最も原始佛教の精神を見るに於て、信憑すべきものとの定論のある御經である。其中に一乗の道を説くことがあります。

又増一阿含經（同上參照）の方に「大乘ノ行ヲ覓ム」といふことがあります。又「菩薩ハ發意シテ大乘ニ赴ク」とあります。故に小乗の増一阿含なり雜阿含の中にも、やはり大乘といひ、一乗といひ、眞如法といふ言葉が使つてあるので、後年大乘家が、

小乗といへば非常に違つたものゝやうに考へたのは誤解であり、且つ法華經の開顯の思想に逆行して居るところのものであると謂はなければならぬ。又一乗主義を主張するに就て、佛教内の阿含さへも開顯融合することが出來ずして、いかにして佛教以外の世間の文明が開顯せられるものであるか、考へ來れば、其行き方が誤つて居つたことは明白であると思ひます。

尙ほ其外大寶積經等にも、大乘の義理に就て名文が澤山ありますけれども、餘り煩雜になりますから、典據は是だけに致して置きます。

二 一乗主義の種類

次に一乗主義の種類に就て、一言したいと思ひます。

一乗主義といへば、唯々一つのやうに速斷する人が多いのでありますが、それは頗る粗笨な考である。要するに、大乘といふ言葉は一つであつても、其内容に於て異るといふことは、從來心得られて居ることである。大乘といふ言葉の時には、内容の相

違によつて分類すべき必要あるに拘らず、それが同じ意味である。一乗といふ言葉の時には、一つしかないと思ふならば、それは寔に粗笨たることは明白であります。故に近來一乗主義といふ言葉をテラホラ耳に致しますけれども、是が盛んに用ひらるるに至つては、特に注意しなければならぬのであります。

少なくとも私の考では三通りの區分を見なければならぬと思ふ、まだ細かく分類すれば幾つにも分かりますけれども、強いて分類を欲するのでない、少なくとも三種の分界を知らざれば、茲に誤解が起ることを考へるのであります。即ち、一は但平等的の一乗主義、二は但差別的の一乗主義、三は統一的の一乗主義と、この三つに分かれる、この言葉がよく適當するか否かは再考の餘地あることではありますが、内容を説明致すならば、其意味合は渝らぬこととあります。

先づ但平等的の一乗といふは、いかなる意味かと申しまするに、佛教内部に於て、權實本迹等の區別を見ないで、即ち混同してしまふのであります。一つの佛教ぢやないか、一乗主義であるのだからして一佛教ぢやないかと云ふと、今日の世俗に普通佛

教主義と謂ふ所のもの、即ち我々が謂ふ所の混同主義の佛教であるが、これが一乗主義といふ言葉によつて現れて來るやうに思ふのであります。又世間と佛法とに關しての一乗的關係に於きましては、墮落して世俗に流れる弊を生ずるのであります。世法即佛法、佛法即世法といふことから、そこに注意すべき大切な事が缺けて居るが爲に、佛教の權威を失墜し、佛教の精神が隠れて、世俗化してしまふのであります。さうして其結果、寔に淺ましき一乗主義に流れ行くのであります。

それから前に申しました法平等の思想、即ち宇宙間の哲理の觀察に於きましては、法性平等の一面に偏しまして、即ち法性の理は平等であるけれども、法性の現れて居る事、即ち諸法といふものは其處に差別があり、秩序がある。其差別、秩序、それがやはり法の實相であるのであるが、實相は唯々平等の一面だけだと思ひ、總ての事は假相であると見るが如き、この法平等の一乗主義に於ては、誤解が附着して行くのである。そこに最も危しげな思想が胚胎して居るのである。

今一つの衆生平等の方に就きましては、悉く佛性があるといふことに於て單に平等

を見まして、よし同一に佛性があつても、其人の果報に相違がある、其佛性の現れの程度に相違がある、罪福の因縁異なれりといふことを知らずして、唯々佛性平等といふことのみを力説するに至つて、茲に一種の偏見が起るのであります。要するに其平等の觀念が、所謂惡平等の性質を帯びて參りまして、差別に對抗して居るところの平等でありまして、差別が若し病見であるならば、それに對抗する平等もやはり偏見であります。さういふ思想の幼稚なる所に引懸り、而もそれを一乗といふ言葉で説かんとするのであります。

それから第二の但差別的の一乗といふのは、どういふ事かと申しますれば、是は主として華嚴宗が唱へたことで、御承知の別教一乗といふことを彼が言ひます。法華の如きは同教一乗といひまして、他の低い教を開顯して來て、統一的なる一乗となすのである。別教一乗の方は、劣つたものは劣つたものとして斥けて、別に高きものとの間に分界を立て、見るところの一乗である。さうして、其處に即ち孤立的なる一乗といひますか、他の教なり思想なりと分立したるところの一乗を説かんとするのであり

ます。併しこの思想は唯々華嚴宗に限らないのであります。主として華嚴宗が盛んにやりましたけれども、色々の宗派の中にこの差別的一乗の思想が存して居ります。

それは一例を挙げますれば、超越的に流れた思想、禪宗が本來無一物といひ、人生を軽く見て、さうして高き向上を辿らんとする所に一種の偏見が出て來る。さうしてそれは非常に高い所で、世俗を見下して皆夢である迷であるといふ風に考へて居ります。或は眞言の密教、人の爲に説きし教は皆劣る、雲の上に於て説きし教は皆尊い、其處に一乗があると謂ひ、或は淨土門に於ては厭世的未來的の思想を主張して、現實の事などはどうでも宜い、一乗の教は阿彌陀の世界に存する、人世の教には碌なものはない、死んでから阿彌陀の持つて來た船が「一乗の船で、それが淨土へ連れて行つてくれるのである」といふ思想があります。是等は皆眞正の、世間と調節せられたる一乗といふことは出來ない、法華經に説く世間の道德なり政治なり生活なりと調節したる教ではありませぬ。其主なるものは華嚴が標榜致しましたけれども、思想の傾きとして考へますれば、佛教が我國に於て排斥せられたのも、要するに、この第二に屬す

るところの、即ち差別觀の上の一乘主義であつたからであります。

それから第三の統一的一乘といふのは、即ち開顯を理想するのであります。内は佛教の全體に對して、即ち小乘、權大乘、迹門の總てを開顯統一して見る、開顯とは、他の言葉を以ていへば疏通することである、疏通して見て、さうして其處に歸着を明かにするのでありますが、外は世間と佛法との關係を、やはり疏通し統一して見るのであります。此事は、前の經文悉く其意味になつて居るのであります、併しながら其處がよほど大切な點であらうと思ふのです。前に申した法華經の文、即ち「若し俗間ノ經書、世ヲ治ムルノ語言、生ヲ資クルノ業等ヲ説カンモ皆正法ニ順ゼム」といふ文の如き、又は「一佛乘ニ於テ分別シテ三ト説ク」といふ文の如き、何れも皆明白に法華經の一乘主義は開顯主義であるといふことを表明して居るのであります。

それから法性の側に就ても、衆生の側に就ても、法華經の法性に於ては諸法實相論である。諸法實相論とは、實相即諸法、諸法即實相である。小乗や他の思想の見解は諸法は假相、それを没却して只其奥に法性の理があると、斯う説くのである。法華經

は諸法がそのまゝ、即ち實相である、諸法を離れて實相を覓むべからずと説く、法華の一乘主義は平等に偏しない。即ちそれをよく説明したるものは藥草喩品の譬である。天より降る雨は一つ、草木を乗せて居る地は一つである。其處に平等はあるけれども、大中小の木は各々其性に隨つて差別せるところの結果を生じて居るのである、小さな莖草もあれば、大きな杉の木もあるのである、それを皆同じものに使はう、同じ位置に置かうといふけれども、莖草を以て檜と同じ作用を起さすことは出来ない、然ればとて決して是が無理に差別して居るのでない、其處が自然である、一雨は平等或は普等、而して各得増長といつて、各々生長を適度に得て居る所に眞の實相があるのである。衆生に就てもやはり其通りて、單に佛性の平等を見るばかりでなくして、其中に果報の差を見、行位、即ち修行と位といふものを立て、明らかにして居るのであります。此思想は法華涅槃に頗る明白である。而して此二點、法平等、衆生平等といふ思想が現代の文明に就ては大關係がある。西洋のデモクラシーの思想など、いつても、この法平等、衆生平等の思想に就て、第一に言つた但平等的の一乘思想であつて、一種の

偏見に根據して居るものと私は考へる。是は世界の大勢であるからして、之に反抗するのは不利だといふ議論もあるけれども、左様な事は實に痴劣なる見解である。眞理といふものは、世界の大勢などいふことによつて動くものでない、所謂不可抗力なるものである。絶對の眞理といふものは、人の多數を以て反抗するとか、多數によつて動かし得らるゝものではないのである、それが所謂眞理の權威である。必ずや其結果は來るのである。詳細なるそれに對する話は盡すことは出來ませぬが、後に少しく其點を申したいと思ふ。茲には、一乗主義をデモクラシーの人も言ふが、又反デモクラシーの方からも一乗主義を言つて、從來妙な傾きを取つて居りますから、御參考までに申上げて置くのであります。それから此デモクラシーに就て、デモクラシーの善良なる方面に就いては反抗する必要がないではないかと言ふ者がある、そんな事は今更言はぬでも分つて居るのであります、何事でも善良なる方面に就ては之に反抗する必要はないのである。人殺しても親殺しても善良なる方面はある、それに就て反對する必要はない。全體を總括してどうであるかといふ觀察に屬するのである。世界を

風靡せんとして居る滔々たる思想が果して完全であるか、是が勢であるからといふのは人の見方でありませぬ。一時それが勢あるが如くても、又何事かに打突ぶつかれば、其氣勢といふものは直ぐ一轉するのである。さういふ、事によつて變化して行き、動いて行くやうな事は、それは思想上の趨勢としてあつても、永遠に亘る宗教の根本眞理觀としては見られない、世界の大勢などいふことから判断すべきものではないのである。尙ほ其事に就ては、後に一言を加へようと思ひます。

三 一乗主義の本義

次に申上げたいのは、一乗主義の本義である。眞の一乗主義は、但平等でもなく、又但差別でもない、其兩面を併せ照して、内には佛教の全體を開顯し、外には世間の全部を開顯して、之を善導して行くといふ意味に於て、統一的の一乗主義を見るべきである。この統一的の一乗主義といふことが、即ち一乗主義の本義で、他は一乗主義の賈物といつても宜しいのであります。又もう少し悪い符號を付けて見るべきであり、

單純に一乘主義といふことを將來言ふならば、無論この統一的なる意味でなくてはならぬと思ふのであります。今暫く之を眞の一乘主義とでも申しませう。而してそれには何が大事であるかといふと、統一は無論であるが、その統一といふことも意味があるのであつて、統一の一といふ意味は、周圍から寄せ集めて來て、何でも一つにしてしまふといふことではないのである。一があつて、それに吸込まれるのである、一つに統べるのである、即ち統の字の由つて來たる所である。統べるといふ字は、色々のものを統率して、一つにする場合でなければ、決して出て來る字でない。一つの標準があり、中心があつて、それに引着けられるといふか、それに救ひ擧げられるといふか、其處に初めて統一といふことがあるのである。色々ゴチャ／＼になつて居るものが集つて一つになつてしまへば、成程それも一ではあるが、統一ではなくて、それは混同といふことになります。混同とはいへるが統一ではない、統一といふに就ては、よほど其處に氣の利いた意味がなければならぬ。即ちそれは中心といひ、標準といふ言葉を以て、佛教では昔から之に能開所開といふことを謂ふのである。能所といふの

は、それを統一する方の力あるものと、統一される方との關係であつて、能開所開といふことを混同すれば、もはや一乘主義といふものはないのである。

故に今佛教の經典に就て、一乘主義を言はんとするならば、先づ法華經の本門の教義を標準とするといふことが前提である。法華經の卓越を知らず、法華經を解釋するにしても、その中心の本門壽量の最高教義を握らずしては、統一といふことの出て來る所がないのである。それから又世間と佛法との關係に就ても、佛教の教義を標準として、さうして淺薄なる世間と、混濁なる世間を開顯するといふこととなければならぬ。それが、世間と融合するのであるからというて、世間に引摺られて行つてしまふといふやうなことではいけない。世間の道德、政治、經濟、生活の全部に對して、佛教の正明なる教義を以て、之を善化して行くが本義である。若し世間、佛教が一乘ぢやといふ言葉に迷つて、佛教をむやみに、世俗化する／＼というて、其能開所開が分らなくなるやうなことになる、恰度、佛とは乾屎擗だといふやうになる。あれも悟の積りだけれども、實に愚劣極まる。或は、佛教とは多福の小便のことだと言つたり、

酒を飲んで寝た所が極樂だといふやうな事を言つて、悟つたかのやうな顔をして居る。其外、さういふやうな愚な事が間々あるのです。我が本尊は汁と飯なりといふやうな事を言つて、それで以て悟りがましく考へて居る人がある。さうして佛教の崇高なる思想を否定し、永遠の希望を打棄て、又幽妙なる理智を侮り嘲り、鴻大なる慈悲を忘れて、只淺薄なる世俗化したる所に一乘を見んとする者もあるけれども、是れ全く愚劣なる見解である。是れ實に學を以て世に立つ者の恥づべき事である。少しく激しいかも知れませぬが、二宮尊徳翁が話したものだと言つて居るところの「二宮夜話」といふ本がある。是は大内青巒氏が話されたのには、二宮さんが書いたのでなくして、箱根の福住樓の主人が少しばかり筆が立つので、尊徳翁の門人であつたが、それが書いたのである、併し丸きり拵へ事ではない、尊徳翁も多分あんな事を言つて居つたのであらうと云はれましたが、それを私よく讀んで見ました所が、孔孟聖賢の道德を嘲る口吻が到る處に在る。又釋迦の教をも侮辱するやうな事を云つてあるのであります。即ち例へば、我が經典は天地なりとかいふやうな事を言ひまして、田を作ることを知

らんければ、本をいくら讀んでも駄目だとか、一寸欺されやすい言葉であります。無論本ばかり讀んで居つても腹が減るぢやないかと言はれて、大きに然りだといふやうな事で動く者は、學を以て世に立つ者の恥辱である。左様な淺薄な思想が世に蔓るときには、全く其國の文明といふものは鼻を突くことになるだらうと思ふ。現に鼻突きかけて居るのである。又古來心學道話といふものがあります。諸君御承知であります。是等は色々なものを取寄せてやつて居るのである。寔に世俗生活に適切なやうであるけれども、深い思想の根柢といふものを定めて居らない。所謂世を善導する根本思想といふものがないからして、中庸にあるところの小人の道である、的然として日に亡ぶるのである。寔に尤もらしくは云つて居るけれども、思想に根柢がないからして、歲月の経過と共に効果を失ふところのものである。故に佛教の一乘主義を、この心學道話的に、二宮尊徳的に、汁と飯的に考へるやうな事を以て、説かうといふやうな、間違つた、淺薄な、痴劣な坊主も居つたのでありますが、左様な事は、是れ全く淺學の致す所であると云ひたいのである。釋尊一代の聖教を通覽して、佛陀の精神の

ある所を窺つたならば、云ふまでもなく分るのでありますが、さういふ、佛教が世間を教化する權威を失墜するやうな事は、佛陀は斷じて變にも出されないのである。若しさういふ言葉を以て向つたならば、釋迦は猛然として起つて、その愚を攻撃せられたであらうと思ふ。今尙ほ見るが如くである。若し釋迦牟尼此に在まざば、さういふ事を言ふならば、實に激しい折伏を試みられることと思ふのである。彼の釋劣の説は永遠に世を救ふ所以ではないのであります。左様な事で間に合ふならば、強ち佛陀の出現を要さないのであります。

それから法性と衆生、更に加ふれば佛陀といふこの三つに就て、所謂宇宙觀と人身觀と超人觀との三種に就て、やはり中心思想を押へなければならぬ。その中心思想がなかつたならば、一乗主義といふものは存立しないのである。それは簡短に申しますれば、法性の妙は理の平等と事の差別とを知つて、さうして事理不二であるといふことが、一乗主義の押え處である。どうしても一乗を握らんとするならば、理の平等事の差別、而して事理不二といふことを達觀することが、入口の所で考へなければならぬ事てあります。故に法華經の議論では、諸法實相といふ四字に就て、妙樂が、諸法

即實相、實相即諸法、之を妙法と謂ふと解釋して居るのであります。即ち二にして而して不二、不二にして而して二と、斯ういふので、この場合どつちでも言へるやうであるけれども、若し二にして而して不二といふ所に結論を置けば、社會は秩序を失つてしまふのである。不二にして而して二といふ所に之を置かんければ、一切の道德も、宗教も、政治も、經濟も、人生の存在といふものもないのである。一切が不二といふことであるならば、忠も孝もなければ、義も信もなければ、善も惡もない、善惡不二、邪正一如、寢て居る者も働いて居る者も同じ事である。こんな事であつたならば、無宗教、無道德、無秩序と成り、社會は混亂の状態に陥つてしまふのである。故に如來は、教を立てる場合に於て、此點を最も嚴格に訓誡して居るのであります。どの御經でも、さういふ思想が現れた時には、特に吟味を加へ慎重に説いて居るのであります。此點に對しては、自分は是まで大藏經を閲覽致しました上に於ても、如來の用意の整つて居ることに、屢々感佩したのでありますが、この不二論が出た時に、席に列なれ

るところの大衆は、席を蹴つて立たうとして居る。果して不二ならば、是より我々は何の目的の爲に修行學道するか、もう一切を打棄てて此席を去りますと言つて、佛然として席を立たんとして居る。その場合に、イヤ待て〜逸るな、不二といふことは無論不二に違ひない、不二といふことは大切な事だけれども、併しながら不二であるからどうでもよいといふ譯のものでは決してない、待て、座せよ説かんと仰せられて、不二の中から秩序を説き、其處に色々平等と差別との微妙なる關係を示すものが即ち佛教である。それを説き放しにして、世俗の迷を起さすものは、是は實に不覺といふもので、全く佛教を習ひ損じた大邪見である。日蓮聖人の憤慨せられたのは其點である。それは二圓同に對しても起り、禪宗攻撃に對しても起り、總て日蓮聖人が但令用實とまで言つて、天台の開顯は宜かつたけれども、併し權實の分界を餘りに緩漫に、附したが爲に、其中から彌陀崇拜論が起り、源空が勢力を得て、法華の勢力を失墜するに至つた、是れ統一の標準を輕んじたが爲で、叡山が蹂躪されたのであると言つて、憤慨の血を流されたのである。それは實に法の爲にも、國の爲にも、日蓮聖人の絶叫

されたる所であります。又從來一致勝劣といふことで争つたのも、枝葉に至るといふと詰らぬ事もあるけれども、現代の思想に比ぶれば、其處に一つの生命ある問題であらうと私は考へる。

それから衆生に就て考へても、是は同じ事であつて、衆生に佛性がある、十界互に具して居るといふやうな事は、是は平等の側であるけれども、それは只本體に就て言ふのである。因縁關係といふものの上から見れば、罪福果報といふものが違つて來るのである。丁度月の體は一つであつても、晦の月、三日月乃至十四夜の月、十五夜の月、各々其光に差別があるのである。而して佛教徒に對する一般の讒告ともなつて居るのは「鼠啣々ト鳴ケドモ即ノ即タルヲ知ラズ」といふことがある。鼠の鳴き方を、支那の形容詞では、啣々といふ、啣々と鼠は鳴くけれども、即の即たるを知らず、大乘だの平等だのいつたところが、不二にして二といふところの、ケジメが分らぬやうな者は、鼠が鳴いて居るのと同じ事だといふ、これは眞向太刀割に惡平等を痛撃したる言葉である。然るに其事を言ひながら、尙ほ且つ惡平等の思想に走るに至つては、

實に暗愚度すべからざる者である。故にそれに續いて出て居る言葉は「何レノ處ニカ天然ノ彌勒自然ノ釋迦アラシヤ」、天然の儘にして彌勒菩薩も出來ず、自然の儘にして釋迦も出來ない。各々徳を積み行を運んで得たと言はれてある。壽量品に本佛を説くにしても「久シク業ヲ修シテ得ル所ナリ」と云ひ、或は「我本菩薩ノ道ヲ行ズ」と云ひ、何處までも行位果報を尊重して居るのである。是に對しては種々の譬があつて、例へば井戸を穿つに就て釣瓶の事をいつてある、それは、地中に水のあるといふことは平等であるけれども、井戸を掘つてある所と掘つてない所とは違ふ、又井戸があつても釣瓶の附いてある所とない所とは違ふ、又釣瓶があつても繩の附いてあるのとなゝいのとは違ふ、井戸を掘つて、釣瓶を拵へて、繩を結つて、水を汲んで、それを使つて飯を焚いて食ふのと、井戸を掘らぬで、水も使へず、飯も焚けず、乾干になつて居るのは違ふといふやうに、釋迦は、地中に水のあることは平等であるけれども、それを活用するに就ては種々なる差別があるといふことを説いたのである。それが眞理である。それをどうも、地中に水が平等にあるからして、井戸のある所もない所も同

じ事だ、其水を利用して、物を焚いて食ふのも、焚かず食はぬのも同じ事だといふのは、實に愚なる思想である。尙ほその外、釋迦は到る處に罪福の因縁を明かにして、佛の悟は、只法の平等を見るのみでなくして、寧ろ衆生の個々の罪福を見なければならぬといふことを説いて居る。提婆品に、佛を讚歎する場合に「罪福の相に達し玉へり」と言うて居るが、佛は法の平等を知り玉へりと言ふに止まつてゐない。壽量品に「道ヲ行ジ道ヲ行セザルヲ知ツテ度スベキ所ニ隨應シテ爲ニ種々ノ法ヲ説ク」とある、度すべき所に隨應してといふことは、差別があるからこそ初めて種々の教化が生ずるのである。平等のものならば、度すべき所に隨應してといふことはない。道を行じ道を行せざるを知つてといふ區別がない譯である、而して是は大宗皇帝の序文であつたが、其處に非常に注意してある、人に皆佛性はあるけれども、道を行せざれば光明は現れない、のみならず、壽量品には「放逸ニシテ五欲ニ著スレバ惡道ノ中ニ墮チナン」といふとがある。只佛性ありといふことを恃みにしてはいかぬ、汝等放逸にして五欲に囚はれたならば惡道の中に墮ちるぞといふ點を序文に書いて居られる、是で初めて宗

教の意義をなすのである。故に實地の問題としては、飽くまでも賢を賢とし、愚を愚とし、而して自分の愚を恥ぢ、長者を敬ひ、後進を憐み、人生社會の秩序的發達を期するが、佛教の本旨である。

又佛身觀の問題に就ては、諸佛平等といふことに流れて行けば、まるで一乗の教はなくなつてしまふのである。根本の中心が立たぬのである。故に昔から平等意趣といふことは、殆んど卑む言葉のやうになつて居る、開目鈔にも「平等意趣ニモ似ズ、オビタマシク驚カレヌ」と言つてある。現代思想が進んで居るといふが、それは決して新しい思想でもなければ、又進んだ思想でもない、既に昔に於て言はれたところの古い思想である。私は之を新しい思想といふのはおかしいと思ふ。徹の生えた思想である。それが事に觸れて起つて來たのである。先づ人々が同一なる價値を持つて居るといふやうな事が、何も新しいことはない。凡そ佛教に於ても、儒教に於ても、各人の本質本體に於ては同一の性ありといふことを言つて居るけれども、其處に實際問題としては社會の秩序を認めて來たのである。故に今の社會に於て、この秩序を呪うて、

單に平等の側を力説せんとすることは、決して進歩したる思想でないのである。何といつても佛教からいへば、方等の思想、別教の思想であつて、法華開顯の思想には未だ至らざるものと思ふ。日本佛教史を窺ひ見ますれば、叡山創始時代の權實双用の佛教にして、日蓮出でざる時の思想であります。故に佛陀觀に於ては、釋迦を中心にして顯本する諸佛諸天善神等は一切釋迦に於て開顯せらるるといふことが、一乘主義の中心教義でなければならぬ。若し佛身は平等なりといふことに於て、釋迦を捨てて、彌陀大日等に走るといふことであるならば、それは取も直さず佛教の分裂を是認することであつて、一乘にあらず、統一にあらず、多乗となり、分裂となり、偏傾となるところの思想である。佛教徒の信仰を統一しよう、その信仰の中心點は何處にあるかといふことが開顯せられずして、何處に一乗がある、斯の如くして、佛教に於ては、統一を語るには法華經を中心標準として、能開所開を明かにし、又世間と佛法とに就ては、佛法を標準として、世間を善導する、而して其間に調和融合を計り、又法性に就ては、理の平等と事の差別とを併せ見て、諸法の實相を、世間相の上に見て來る、平

等の一面を見るのは實相でないのである、非實相である、世間相常住と言つた如くに此處を了解すべきで、善もなく悪もなく、迷もなく悟もなく、渾然たる一つのものになつたのが實相だといふ如き思想は、是れ一種の偏見である。又衆生の上には佛性の平等を無論見なければならぬが、果報の差別を見、佛陀の上に於ては、釋迦中心の思想を嚴重に守持して行くのが、一乘主義の本義であると思ひます。此に至らずして、漠然と一乘主義をいふのは、全く人を謬らすところのもので、古き時代に破られたところの滅びたる思想である。今日の、但平等の一面を見て、社會の秩序を尊重せざるが如き思想は、是は嘗て排斥し去られたる過去の文明である、古き思想である、故に現代の新らしき思想といふことは、今はそれに酔ふ人が多いからして、非常に氣が利いたものだと思つて居るけれども、私はどうも是れには賛同が出来ないのである。

日本佛教史の争を考へれば、滔々として、證眞が二圓同と云ひ、法華の圓と爾前の圓とは一なりと言つた、即ちそれは混同的である。又禪宗が「我ハ即チ佛ナリ、

佛何カアラン」と言うて、佛の頭を打つやうな思想は、過去に於て既に葬り去られたるところの、惡平等の思想である。又禪宗坊主が、善惡不二などと言つたが爲に、明智光秀が、禪宗坊主の話を聽いて、安心して主人信長を殺したといふことは、日本歴史の明かに證明する所である。この惡平等の思想は、道德上に於て、斯の如き大害を遺して居るのである。又先年の大逆事件の時にも、この思想を抱いたところの禪宗坊主が居る。實に危険なる思想といふべきである。此頃の所謂デモクラシーの思想には、危険性を帯びないといふことは、非常に嚴密なる分解をした場合に於てのみ言ふべき事であつて、滔々として起つて來る場合には、必ずや其の處に危険が伴ふもので其例は、普通選舉の示威運動だといつて學生が騒いだり、勞働問題で騒いだり、米騒動をやつたりすることは、少しも喜ぶべき事でない、褒むべき事でない。是等は即ち惡しき影響を受けて居る證據である。霜を踏んで堅氷至るといふことから考へれば、なか／＼油斷のならぬ思想である。又或意味に於て、デモクラシーの持つて居るところの善良なる方面を主張したいならば、さういふ言葉によらなくとも、我國に於て古來唱

へて居るところの立派なる思想があるのであるからして、其思想によつて、其要求する所を言ひさへすれば宜いのである。であるからして、私は、あれ等は既に倒れたる思想、死したる思想、骸骨である、古き骸骨に狐が附いて躍り出して居るものだと思ふ。今に狐が落ちれば元の骸骨である。たとひあの思想が滔々として世界に蔓つても、あの思想の爲に、世界の文明は、幸福を受けるよりも、寧ろ大なる禍を受けるものであるといふことを、私は思ふ。大なき問題を豫言し過ぎるやうであるけれども、どうも佛陀の明鏡を以て照せば、さう思はれるのであります。

四 一乗主義の運用

更に上げたいのは、第四に、一乗主義の運用といふことであります。一乗主義なるものは、元來活動を以て生命として居るもので、死せる主義ではないのである。それは釋尊の當時に於て、印度に働かれた有様、即ち世間を善導し、外道を啓發し、又自らの教を統一せられたこと、是が即ち今の言葉で謂ふ所の運用といひ活用といふこ

とに重きを置いて居られたと思ふのである。それから、方便善巧といふ言葉であれ、法華經に於ては、方便品を劈頭に説いて、方便即眞實であるといふことが佛教の生命である。是も古來方便眞實に就ての混同の弊と、及びそれを分離し過ぎた弊とを生じて居るのでありますけれども、佛陀の眞意を了解したならば、今の言葉にすれば、方便圓だの善巧だのといふことは、運用を謬らぬやうに、最も敏活なる運用をやるといふことが方便である。故に一乗主義の劈頭、法華經の劈頭に、方便品があることに於て、運用の重んずべきことが分らうと思ふのであります。釋迦は世間を導く爲に、蓮華の譬に寄せて、世間と佛法との關係を示して來た。是が即ち運用である。誰が見ても分る蓮に寄せて、さうして一乗主義が説かれて居る。泥の中にも蓮の花が咲くぢやないかといふ所に、一言にして大乘の教が説かれてある。それは阿含の最初の説法である。さうして、法華經の妙法蓮華といふこともそれである。それから、蓮の花によつて高遠なる理想が示されてある。又外道を啓發する場合、六法拜禮に對して圓滿なる教を説き、進んでは六波羅蜜を説き、其運用は實に巧妙なるものである。さうして世間の

事を語れば、何事を語つても、其中に深い意味を開いて、印度在來の文明を保護しつゝ、さうしてそれを啓發善導して居る。婆羅門の教の中から出て、婆羅門の教の偏執を矯正する爲に、之に對しても穩健なる態度を執られた。或時婆羅門の人が來て、お前の教はどういふ教だと尋ねた、斯うくだ、成程良い教だが、さういふ事は婆羅門の教の中にあるぢやないか、如何にも俺の教は婆羅門の教の通りだ、そんなら何故にお前はさういふ教を別に立てるか、其處だ、教は同じだが、内容の講釋は俺に委せて貰ひたいのであると答へた。實に旨い事を言つて居る。俺の教といふのは婆羅門と同じだ、別に特別な教は持つて居らぬ、お前等の教の通りだけれども、講釋の仕方は俺の方が巧いから俺に委してくれと言つた。その位に釋迦は一乘主義を活用したところの偉人である。又一雨三草の譬を擧げ、様々なる比喻を擧げて、一乘主義の運用を試み、且つ印度當時の宗教、學問、政治、軍事、道德、經濟、制度、習慣、生活の全部に對して、釋迦は大感化を與へたのである。全く理想的の文明を創建する爲に努力したるところの偉人であります。故に佛教内部に於ても、其經典を調べれば、今申し

たところの多方面のものを各々指導してあるのであつて、單に死んだ先だけを教へて居るものでないといふことは、大藏經の全般に亘つて證明されて居ることあります。又釋迦は、印度に於ける彼のカストの制度を攻撃しましたが、それが爲に、釋迦は今所謂デモクラシーの平等を主張するかといふと、決してさうではありませぬ。カストの制は、階級の弊害に堪へぬ爲に之を攻撃して、而して今の或意味に於けるところの平等を唱へたのではなく、何處までも社會の秩序を尊びまして、師長を恭敬することを忘れない、師匠なり長者を敬ふべきことを、口を開けば言つて居る。それから婆羅門を敬へといふことを言つて居ります。即ち思想家を尊ぶのである。之に反して近來のデモクラシーの思想といふものは、決して思想家を尊ばないのである。其例を見ますれば、デモクラシーの思想の實現であるところの、彼の宗教改革意見としては、宗教家に特權を與へないのである、僧侶不用論である、神と自己との直接關係であつて、其間には何者をも必要としないといふのである。其間に、それを説明するとか解釋するとかいふ者を認めないのである、或意味に於ては、それでも宜さ

さうなものであるけれども、さういふ風にやつて行く間には、色々思想が分裂もし統一を失つて、譯の分らぬものが出来ることになるであらう、どうしても人生には、其事に専任する者がなければならぬのである。軍人は軍人、宗教家は宗教家、商賣人は商賣人と、各々分擔に従つて、其處に秩序を生じて來るのは當り前の事でありませう。釋迦は左様にカストの制度は打破することに努めたけれども、師長を恭敬するといふことは極力説き、又四恩の關係を説き、又君主々義の價值を力説して居るのである。民主々々と言ふけれども、決して民主でなければならぬといふことはないのである。民主といふことにも非常なる短所がある。故に従來民主ではいけない、君主立憲が一番良いといふことが殆ど定論であつた位である。それを只譯もなく、十分吟味もせずして、偶々君主立憲國の所に、例へば獨逸が戰を起したといふ一つの爲に、むやみやたらに君主立憲を非難するけれども、それは中らぬのであつて、民主國であるからといつて、戰をせぬとはいへないのである。而して社會の事情は、どう變化して行くか分らぬ。國際聯盟の美名によつて、或は他の國の特權を侵して來ることになるかも知

れぬ。政治上の運用といふものは、なか／＼表面的觀察を以て見ることは出来ない。私は信じて居る。だからして、どうしても釋迦の言つたる如くに、一面に平等の眞理を押へても、社會を組成する上に於ては、秩序の重んずべきことを何處までも認めなければならぬ。其處が眞の一乘主義である。此思想を承継いだる者は阿育大王でありまして、釋迦の全精神を實現して行つたものであります。故に道德を布き、政治を行ひ、又戰もやりましたが、一段の文明を開發したることは、今日に於ても歴史的に明らかになつて居るのである。又勝鬘經を見、仁王經を見、守護經を見ますれば、釋迦の志の存したる所は頗る明白で、今の寺院佛教、宗派佛教を以ては満足しないのである。實に釋迦は、文明の理想的創建に従事したるところの人である。或は又心地觀經を見、優婆塞戒經を見、大薩遮經を見るならば、益々人類の文明に對して、理想的なる建設を試みたるころの偉人であることが明白である。

故に、斯かる意味に於てこの一乘主義を考へて行くならば、よほど大切なる意味が包まれて居るのである。何も世の中の思想界へ佛教が入込んで行つて、無理やりに、

是まで隙がない所に、お寺の中で鉦を叩いて居つた者が、世の中に押出して行つて、頭を入れるのではないのであつて、元來釋迦の提唱したる事が、今日問題になつて居る事に就て、指導を以て任ずるが佛教徒の本領である。我國に於ても、第一聖徳太子を通過して佛教にさういふ意味が現れ、傳教、日蓮に至つて、明らかに眞實の一乗主義が應用されて來て居るのである。傳教は王法佛法の冥合を實現した。さうして大いに我國の文化に貢献して居る。而して彼は守護國界章なるものを著はして居る。日蓮は傳教の理想を繼いで、王法佛法の冥合を理想し、我國の文化に貢献せんとして努力した。故に守護國家論や立正安國論を述作して其志を述べた。是が一乗主義の應用である。何も無理に坊主が飛出して、國家を論ずるとか世間の事を論ずるとかいふのではない。元來一乗主義なるものは、進んで世間と交つて、世間を善導すべきものである。併しながら世間に汚されない、若し飯と汁なり、飲んで寝るが極樂なりといふやうな事で濟むならば、放つて置いたら歸つて寝るに違ひないのぢやから、そんな事を言ふ必要はない、さういふ淺薄なものではない。絶えず世間と相交つて教化を布くのが本旨である。故に傳教は、南都六宗の統一を絶叫した、日蓮は諸宗統一を企てた、さうして道德論としては大義名分を尊重して、北條の無道を痛撃し、又佛教の厭世的弊害を矯正し、「天晴レヌレバ地明カナリ、法華ヲ知ル者ハ世法ヲ得ベキカ」と言つて、大いに法華と世間との繋りを教へて居るのである。其他生活の全體に亘つて開顯の意味を力説したのである。是が即ち一乗主義の運用である。けれども其奥には開目鈔に示すが如く、先に述べた佛陀觀、人身觀、宇宙觀に就て中心の教義を、最も明晰に、且つ嚴格に説いて、之を守持して居るのである。此守持する所なくして、ユラリクラリと出て來た一乗主義ならば、それは贗物である。中心として奉持する所なくして、一乗主義をいふ者は、全く是は偽である。それは獨り運用の上に誤謬が生ずるばかりでなくして、確かに社會を毒害するところの結果に陥るのである。故に眞の一乗主義は、最も敏活に、且つ的確なる運用を理想して掛らなければならぬのである。

五 一乗主義と西洋思想

第六として申し上げたい事は、一乘主義と西洋思想といふことであります。西洋思想といひますと、頗る廣いことで、一概には論じ去り難いことでありますけれども、大體に於て申せば、彼は分裂的偏傾的であります。要するに開顯統一の眞の一乘主義を缺いて居るところの文明であるといふことが云ひ得られると思ふのである。

先づ試みに、希臘文明と稱して居るところの、智識を尊び、現在の生活を豊にするといふことに就て考へますればどうであるか、それは遂に智識に流れて科學萬能のやうな弊が起つて來て、崇高なるところの精神の問題が疎んぜられて、宗教の信仰もそれが爲に輕んぜられる、高遠なる哲學もなくなつて、實際哲學といつて、一も經驗二も經驗といつて、形而下の智識に於て觀察の出來ない事は、悉く否定し去らんとするところの弊風を生じて來て居る。是は、智識を尊重するといふことは、悪い事ではなけれども、それが流れ／＼して所謂偏傾的の文明を現出して居る、現實を尊ぶといふことも無論宜しい、現實の生活を豊富にすることは宜しいけれども、それが流れ／＼して享樂主義となり、裸體女の像ばかりを澤山畫いて喜んで居るやうな文明は、いかに

辯護したからといつて、是は決して理想的のものとはいへない。滔々として劣欲を煽つて來た、それが爲に實利の衝突となつて、國內には勞働問題が起り、又國と國との間には、極端なる侵略の争が起る、是れ即ち希臘思想が勝を制して蔓つたる結果、現れたる偏傾の一種である。

又羅馬の文明と稱して居るところの國家觀、法律思想といふことがどうかといふと、國家觀の方は、殆んど實利主義の國家に流れて居るのである。近來人道正義を謂ふけれども、それは只表面を飾る言葉に過ぎないのである。從來其國のやり來つた態度、現在やりつゝあるところの態度を見るに、成程兵力には頼らぬか知らぬけれども、經濟の戰に於て、他國の生血を吸ふ如き事をやつて居るのは、天下周知の事實にして、武力の上に於てのみ、人道正義は謂はれるかも知らぬが、經濟戰の上に於ては、何等人道主義を語る資格はないのである、故に皆實利主義の國家である。又法律の觀念といふことにも非常なる偏傾を生じて來て、一も法律二も法律といふことで、只法律に規定されたる權利といふことのみを重大視して、由つて生ずる弊害は、甚だしく世を

毒して居るのである。或程度に於ては法律も大切であるけれども、偏すれば弊害を生ずるものである。而してさういふ思想に胚胎した西洋文明の弊害は、現に横溢汎濫して居るのである。故に一方からは法律全廢論が起り、國家破壞論が起つて來て居るのである。この法律全廢論や國家破壞論の起るといふことは、其等によつて生じたところの弊害が、あり／＼と、痛切に直接に、人心に響いた結果であらうと思ふ。偏傾の文明の其反動が、即ち無政府主義、國家破壞論、法律全廢論となつて起つて來たのである。現に起つて居るのである。

更にヘブライ民族の文明と稱して居るところの、愛の道德、家族的の美風といふことはどうであるかといふと、是は全く勢力を失ひつゝあるのである。基督教の如きも、愛を説いては居つたけれども、事實は頗る迎合的な性質を帯びて居るものであつて、世の中が實利主義を叫べば、やはり基督教もその提灯を持つ實利主義に迎合し、個人主義を叫べば、やはりそれに對して提灯を持つて、個人主義に迎合するといふやうな工合で、世の風潮につれて偏傾するものであるからして、表面に愛を説いても、實力

はない。彼等基督教國が世界の人類をば、斯の如く暗黒にしたのである。基督教國何の誇るべき所がある。又日本や朝鮮に來て居るところの基督教と雖も、眞に日本の國を愛し、日本の國民を愛して、やつて居るのか、或ものに囚はれて、或ものの爲にやつて居るのか、甚だ判斷に苦しむことが多いのである。さうして見ると偏傾といふことは彼等の特有性の如くに考へられる。又家族的の美風といつた所が、是れ亦年々に衰へて來て、却て新しき婦人といふやうな事になり、家族生活の美風といふやうな事は、殆んど地を拂ふに至つて居るではないか。故に西洋の文明は、長所は段々と衰へて、年と共に偏傾し、益々弊害が盛んになりつつあると見るべきではないか。

今一つはチュートン民族の文明と稱して、獨逸人なり英吉利人なりの祖先の持つて居つたところの文明があるさうであるが、それは個人の力を尊重するの思想で、人格主義といひますが、自己の力を盛立てて行かうとするのである。是は一面寔に結構なる事である。各人自分の力倆を發揮するといふことは、非常に宜しいけれども、それが又偏して極端なる主義となり、自我の觀念となり、全く實利的、我利的に發現して來

たのである。東洋では、自我といつても、明德とか佛性といふものであつて、自我は非常に清い道德性を前提として居るけれども、西洋では、自我が、何であらうとも、自己判断に委せて居るから、泥棒的自我であらうが、人殺しの自我であらうが構はぬ。而して、是は私が言ふのではない、亞米利加人が批評して居るのであるが、チユートン民族の自我觀念には、山賊海賊の血が多く混つて居るといふ、日本人が言ふ程、西洋人の間には、彼等の人格は尊ばれてはゐないのである。今言ふところの、チユートン民族の血の中には、最も不純なるものがあるといふことは、公平なる批評であらう、故に、事實に於て自我の發現する所には、種々なる害毒を流して居るのである。即ち或は勞働問題となつて、互に噛み合ふのも、皆此處から來るのである。其結果がどうなつて行くか、八卦見でないから私は言ふことを好まぬけれども、併し是だけの事は言へる。即ち頗る安心なり難き傾向を持つて居ると。是だけは言つても差支ない。賣卜者でないから將來それがどうなるといふ精しい事を言ふことは出來ませぬが、是から段々櫻の花が咲いて來るとは思へない。いつ暴風が吹いて來るか分らぬ。いつ地震

が起つて來るか分らぬ。不安なる状態を以て組成されて居るのである、故に彼等の文明は。何等羨む所はない。此點だけは私は斷言するのである。

而して是等全體の文明を指導するところの思想は、今何處へ傾いて來たかといふと、この四つの文明が、一つのデモクラシーといふやうな言葉に引着けられて來たのであります。全體が一つに傾いて居るのである。併しながらその内容を分解したならば、今言ふところの思想の上から發生して來て居るところのものである、故に之を佛敎の言葉でいへば、衆生平等といふことに偏して居るのであつて、即ち衆生が持つて居るところの果報の差別、其者の行位、即ち行なり位といふものを無視して居るのである。位といふものも見ず、行といふものも見ないから、一年生も五年生も分らないのである。學校に入つて居る者は皆一樣に學生であるといふのである。學生には違ひないが、學生といつても一年生二年生三年生、いくらもある。而して學生の人格を尊重すべしといふことは一つであらうけれども、其處に色々差別がある。又法平等の一面を見て宇宙の眞理其ものの差別の尊重すべき所以を忘れて居る。平等を尊重する一面を知つ

て、差別を尊重することの一面を忘れて居る。それであるからして、其思想の偏傾する所は、宗教だの崇高なる道德だのといふものを呪ふのである。デモクラシーの思想に於ては、宗教は迂遠なるものといふことになつて来る。必ずさうなつて来る。各々自分の判断が最も尊いものだといふ思想であるからして、自分が頭を下げてそれに導かれるといふことは、屈辱であるといふことに考へる、一概に卑怯なる事であるかの如くに考へる。故に彼等の思想傾向は、必ず宗教なり高き道德といふものから離れて、自分の判断、自分の思想、それが絶対の權威を持つといふことに考へて来る傾向があるのである。従つて支離滅裂の弊を生じて、争奪、怨恨、結んで解けざるの巷を現出し、彼等は全體の幸福といふけれども、無秩序なる全體といふものは、それは争奪に陥るのである、社會が階級を立て、秩序を設けて居るのは、この争奪を防ぐ爲である。故に眞の統一的なる一乗主義は、彼等は信じないのである。故に彼等は、宗教は科學と相容れぬと云ひ、政治經濟を云ふ者は、道德宗教と離れ去る、要するに彼等は、全く佛教の別教以下の思想である。此意味から考へて、彼等が別教以下或は方等

以下の思想であるとするならば、法華經を奉ずるところの東洋は、彼に教ふところの資格を持つて居るといふことが云へる。日蓮が、日は東より出て西を照すと云ひ、法華經は世界に流布すると云つたこと、又以上のやうな自我自利の精神に囚はれた者も、法華經の光の前には、菩薩の精神に復活すると云うたこと、是等を考へれば、二乗の如き西洋の自利思想の人も、法華經の教化によりて全く菩薩化して、眞の文明に進むことが出来るのであらうと思ふ。故に一乗主義を標榜して、當代文明の融合に貢獻するといふことは、最も良い事であると思ふのであります。

六 一乗主義と我が思想界

もう一つ申上げたいのは、一乗主義と我が思想界に關してであります。我國の思想史を大觀致しますれば、聖徳太子に於て既に一乗主義は闡顯せられて居るのであります。それは彼の憲法の初めに擧つて居るところの勅語、それから憲法の第十七條に掲げてあるところの、篤く三法を敬へ、三法とは儒佛神なりといふ、この三法融合を畫

して、さうして、勅語の中には、各々學ぶ所に偏して他を排斥することは、最もいけないといふことが痛切に論ぜられてある。それは即ち一乘主義である。聖徳太子が一乘主義を重んぜられたといふことは、聖徳太子の法華義疏に於て、方便品の開顯の場合に、大いに五乘開會を主張して居られるに見て明白であります。佛法内部の統一ばかりでなく世間と佛法との統一融合を力説して居られる。それから諸法實相といふことに就ては、差別が所謂實相であるといふ所に力を入れて居られる。一句萬了の金言として居られる。それから勝鬘經を鎮護國家の妙典の一に置き、一乘章などにも講釋を書かれて居る、聖徳太子の佛教なるものは一乘主義である。後に、傳教出でて矢張り一乘主義を取つて、日本の文化に貢献をした。又日蓮出でて、大いに一乘主義を發揮したのである。

聖徳太子の思想は、明治維新の時まで押して來たが、維新の時にこの大方針を破つたのである。それは徳川時代に於て、表面は一乘主義の文明であつたけれども、一部の儒者神官が、非常な偏狭なる思想を抱き、遂に復古神道とか朱子學とかいふものに

よりて、調節されたる一乘的の文明を破壊したのであります。此事を今日の國民として自覺せぬやうなことは駄目である。而して此變化は、我國の思想界に實に大なる禍を遺したものである。實に大失態である。現に我國の國民思想が、今日の不安定を致したのは、其遠因は茲に起つて居るのである。即ち内部の思想が貧弱になつて來た所へ、外來思想が入つて來たのである、その入つて來た外來思想も、唯物的の思想とか、偏傾的思想、前に言つたところの偏つたる思想である。こちらが空虚になつて居る所へ、偏傾的思想を入れたからして、民心が動搖を來たして頽廢するのである。一乘主義の如き、豊富にして濶大なる思想を以て國民を陶冶して居たらば、少々ぐらゐ違つた思想が來ても、決して民心は動搖するものでない。動搖するのは空虚であるからである。而して目下の形勢如何。

實に目下の思想界の形勢を見まするに、一方には新潮派などいふと言つて、西洋の文明の謳歌に傾いて居り、又一方には固有の文明を發揮すべしと唱へる者もあるが、其實は只貧弱なる神道の一派を鼓吹し、國體觀念を養成するには、只神社を崇敬

せしめさへすれば宜い、神社を莊嚴にし、神官を教育し、國學院を盛大ならしむるといふことによつて、國體觀念が養成されるものだと思つて居る。それも計畫の一つとしては反對すべき事ではないけれども、神官を教育して國民思想を善導しようといつても、さしたる働さも出來まい、又神社を莊嚴にするのは結構であるけれども、それによつて今の國民思想が十分に善導されるものであらうか。それはどうかといへば、さういふ形式によつて救はれる時代は過去である、今は思想の内部に入つて、さうして批判とか吟味といふの上より起つた、思想の動搖であるからして、之を形の上から救ふことは出來ないのである。飽くまでも開顯統一の思想を鼓吹し。了解を與へ、邪なるものは攻撃し、活かすべきものは活かすといふ、それだけの力ある一乗主義を以て導くやうにしなければならぬのである。幸ひ、聖徳太子の千三百年祭が一兩年に來るのであるから、此時を期して儒教の良い所は採り、佛教をも發揮するといふとでなければならぬのである。聖徳太子が言つて居られる、儒教や佛教の中には一二採るべからざる所もあるけれども、一二の瑕瑾を以て何ぞ千萬の長所を用ゐざらんやと。それは

孟子を讀んで見ても採るべき所は千萬であり、佛教亦其通りである、故に此意味に於て、一乗主義は我國の思想界に復活すべきものであるといふとを力説する必要がある。

七 一乗主義の歸結

終りに第七として一乗主義の歸結を一言致したい。只今まで申述べたる事を簡単に結んで見たいと思ひますが、一乗主義を語るには三種の區別を知つて、但平等の一乗、但差別の一乗を戒めて、統一的一乗主義を明かにし、さうして佛教を談ずる者は、必ず此眞の一乗主義に來らなければならぬ。さうしてその統一の中心標準を明かにして、宇宙觀の上には不二の上の而二を押へ、人身觀の上には佛性平等の上に果報の差別を押へ、佛身觀の上には釋迦中心の根本を押へて、さうして佛教の教化は、この統一的一乗主義に存するを明かにし、それを時代と國家との上に適當するやうに應用することとでなければならぬ。この佛教の本旨を承け繼いだるものは日蓮主義である。日蓮主義と云へば、いふまでもなく、統一的一乗主義である。さうして前に言ふが

如く、聖徳太子より起つて永く我國の思想を支配して來たものは、一乘主義の文明である。而して衰へたりといつても、今猶ほ國民全體の思想は、佛教も信じて居る、儒教も尊敬して居る、又建國以來の惟神の道も崇敬して居るのであつて、聖徳太子の立てられたる方針は、今猶ほ多數國民の心理に存して居るのである。爲政者又は教育の任に當る人は、この國民全體の精神を尊重し、斯くて、眞の我國の文明の精神を復活すべきである。さうして西洋文明は、どうも一乘主義を了解しないで、非常なる偏傾主義であるから、よし之を採用するにしても、一乘主義の大思想の中に開顯して行くといふ抱負がなくてはならぬ。又我國現時の思想界に對しては、今申す通り、新思想と固有派との二つに就ては、双方の偏傾を警めて、中正なる大道が其處に存するを知らしめ、即ち開顯中正の思想、眞の一乘主義を明かにして、この標榜を以て天下を指導するのが、我が日蓮主義者の本領であると信ずるのであります。

東洋文明の權威終

大正八年五月廿五日印刷
大正八年五月廿八日發行

東洋文明の權威

定價金壹圓八拾錢

著者 本多 日生

發行者 株式會社大鏡閣

印刷者 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舎



發行所 東京市京橋區桶町 株式會社大鏡閣

振替 東京三三六一八 電話 南橋一八一三番
大阪二七一五五

日蓮聖人 聖訓要義

全部拾貳卷
 各四六判總クロス函入
 冊約三百頁頗美本
 定價各金壹圓五拾錢
 郵稅內地十二錢滿鮮廿四錢

本多日生日貌下

聖訓要義全拾貳卷 は日蓮研究の權威たる大僧正本多日生師が畢生の大事業としてかの「大藏經要義」と共にあらゆる努力と研究を傾倒せられたる稀世の大著述にして深遠犯しがたき大日蓮が生命を紛糾せる現代に透徹せしめずんば止まざるの大企劃也。

第一卷

既刊

- 一、緒言
- 二、法華大綱鈔
- 三、法蓮鈔

が畢生の大著述

- 四、法華取要鈔
- 五、如說修行鈔

第二卷

- 六、立正安國論
- 七、開目鈔

第三卷

- 開目鈔全部

五月下旬發行

發行所

東京市京橋區桶町十五
 大阪市南區三休橋南詰

株式會社

大 鐙 閣

閣

振替 東京三三六一八
 大阪二七一五五

大内青巒序 井上秀天著

▲支那禪宗地圖 ▲禪宗源流表
▲禪宗年表附錄 ▲新型總クロス美本

現代碧巖錄詳解

定價貳圓五拾錢
紙數一千百十四頁
送料 內地十二錢
滿鮮三十錢

可驚大膽の快

著禪宗神祕の

解剖公案の現

代化人間處世

の妙典

著者は是新進有數の學徒曾て印度緬甸暹羅支那を巡遊し東洋文明の探究に没頭すること多年、此の深き造詣と拔山の自信と精察研鑽の大抱負を傾盡して茲に尨大八千枚の稿成る。舉例引證古今東西に涉り痒きに手の届かざるなく、諸ゆる類書先人の解釋を超越す。正に之れ東洋思想のエッセンス、世界の謎たる禪味の奧祕赤裸々として示現さるゝを見るべし。

株式會社 大鏡閣發行

碧瑠璃園著

大僧正 本多日生師序
鍋井克之畫 伯裝幀

日蓮聖人

開教聖跡「旭ヶ森」(小笠原下氏筆原色版)
聖人水鏡尊影「立正安國論」の「節」本門の大本尊(イノ版)
四六判總布極美紙數九百頁
定價貳圓八拾錢(送料拾貳錢 滿鮮卅五錢)

日蓮聖人は、宇内を通じて千古を曠うしたる大偉人也。其事蹟を叙したる書、坊間幾十の多きに上れども、其の筆致の枯渴にして情趣の缺如したるを恨むや切也。

著者大に感ずる所あり。親しく聖人に關する靈跡を踏み、史實と史蹟とを密着せしめ、遺憾なく穠艶豊饒なる妙筆を振つて、聖人が一生を紙上に躍動せしむ。殊に顯本宗の大僧正本多日生師、進んで本書に序を寄せられたるを見て、以て如何に本書の價値の大なるかを知るに足らん。

1121

マンダ
ヴィル

東洋旅行記

四六版四百十頁
表装總布滿函入
口繪コロダイブ
定價金壹圓九拾錢
郵稅十一錢

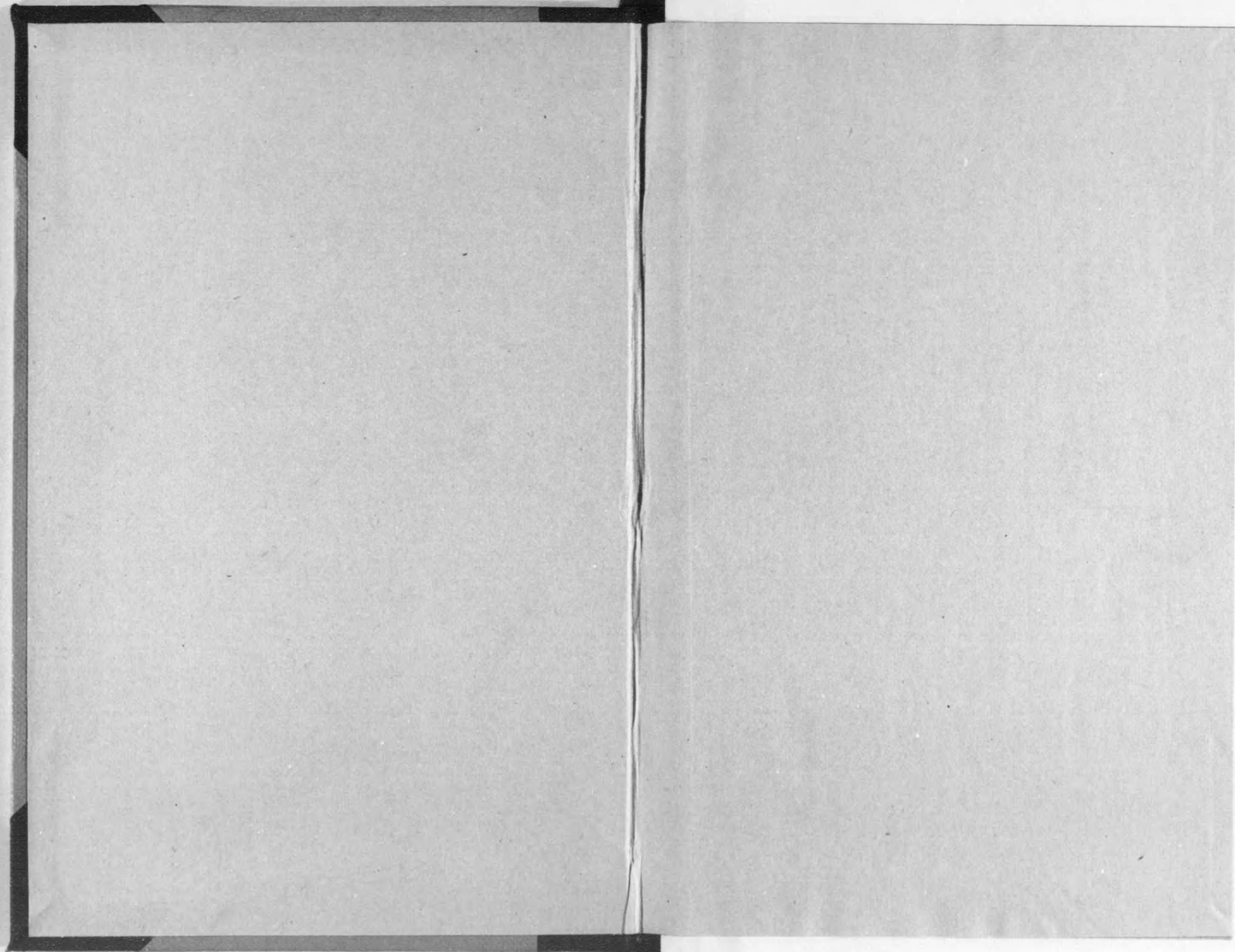
廣島高等師範教授文學士
金子健二譯著

◎世界的名著の新移植成る(翻譯紹介及其研究)

——東洋思想の影響を受けたる英吉利の唯一古典文學——

マンダヴィルの旅行記は中世英吉利文學の中、最も東洋的氣分の多き作にして、今に英吉利文體の模範として仰がれ、歐洲各國の國語に翻譯されたる世界的の名著也。今や我等東洋人は歐洲文明の長を知ると共に、我等の祖先が遠き古へに於て、如何なる歐洲の文學に貢獻したるかを反省せざるべからず、旭日輝く東洋の一天地、悠々四千載、古き文明の流に澎湃として人文の原野を潤しぬ。東洋は實に世界の智、藝術の淵源なりき。多年英吉利の大學に遊び、其國の古典文學を專攻したる著者が、その全力を傾注して特に此移植の事業を企圖したる、また意義なきに非ず、是れ大方の愛誦を乞はんと欲する所以也。





終

